イミテーション・ブライド

淡雪ぼたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イミテーション・ブライド

【Ｎコード】
Ｎ６７０６Ｔ

【作者名】
淡雪ぼたん

【あらすじ】
報酬額は１千万円、期限は一年間…。私は友人の身代わりとして、花嫁になりました。夫は盲目の実業家・・・。《携帯創作小説サイト　フォレストより修正を加えてこちらに引っ越してきました。》

第1話　私は偽りの花嫁

美大3年生の北城七瀬（きたしろ　ななせ）は　、　学食隅の方のテーブルで、友人、小澤（お　ざわ）美奈子（みなこ）　から、とんでもない話しを持ちかけられている所だった。

「親が勝手に決めた、婚約者と結婚させられそうで困ってるのよ。お願い、助けて！！」

「助けてって言われても、どうすればいいの？」

「私の身代わりになって」

「ええーっ」

美奈子の突拍子もない話しに、一口飲んだペットボトルのお茶が気管に入りかけた。

ゴホゴホと咳き込みながら、七瀬は美奈子に慌てて言った。

「そ．．．そんな事絶対に無理だわ！！　第一なんで私が身代わりにならなければいけないのよ」

「私達って声も、顔も結構似てると思わない？　実際良く間違えられるし．．。勿論タダでとは言わないから」

「お金を積まれたって、身代わりに結婚するだなんて、絶対無理よ。全く知らない好きでも無い相手と夫婦になれって事でしょう？　絶対嫌！！ダメ！！無理！！嫌よ」

「1千万円でどう？」

「お金を積まれたって嫌よ！無理！！無理！！絶対に出来ないわ。

偽装結婚だなんて、犯罪行為にもなるでしょう？バレたら監獄行きじゃない。それに、夫婦になるって事は、その人と夫婦生活もあるってことでしょう？　そんな知らない人と・・・絶対に嫌だし信じられないし・・・。私、好きな人と結婚したいし、古風で身持ちの固い女だから・・・」

「その点は大丈夫だと思うよ」

「何でそう言い切れるのよ。夫婦になったら普通あるでしょ」

「相手は盲目なのよ。それに、政略結婚だし、私、まだ学生だし、その点は、卒業まで待ってもらうように話してあるからさ・・・。一緒に生活するけれど、結婚式は卒業後で、それまでは待っていてくれるって言うし・・・」

「じゃあ一緒に生活する事だって、卒業まで待っていてくれるように話したら？」

「それなのだけど・・・相手は盲目じゃない？だから、手元と言うか、自分の傍に置いて、妻になる人を感じていたいって・・・。本当ならすぐ結婚したいらしいのよ、家族をとても欲しがっていてね・・・。

だけど一歩譲って卒業まで待つから、その代わりに一緒に生活をして欲しいって事みたい。

これから一緒に生活を供に出来るかどうかも確かめておきたいのかも知れないわね。

それに・・・うちも親の事業が最近うまくいってなくて、どうしても多額の融資が早く必要なのよ。結婚して、親族関係になれば、融資をお願いする事も話が進めやすいでしょう？　結婚しますってそう言うそぶり見せないと・・・。

融資が決まった途端破談になったら、それが目当てだったってバレバレじゃない。1年間はあなたと結婚しますって言うそぶりみせておかないと・・・」

「いくら目が見えなくたって、相手が違う事ぐらい分かるでしょう・・・。絶対にばれるわよ」

「彼とは2回しか会ってないし、殆ど話した事無いし・・・。彼の家には行った事が無いし・・・。大丈夫よ」

「美奈子の親とか回りが気付くでしょう」

「実は、親には話してあるの・・・。報酬金も親が出してくれるって・・・」

「えええっ。」

全くなんて親なのかしらと思った・・・この恐ろしい計画に、親も加担してるんだ・・・。

「1年過ぎたらどうするのよ」

「離婚というか、結婚解消するつもり」

「つもりって・・・」

「1年間花嫁のふりをしてくれたら、後は私が何とかするから・・・」

「目の見えない人を騙すのって、心が痛むわ・・・酷すぎるわよ」

「それはそうだけど・・・。

こう言っちゃなんだけど、七瀬って、家族は田舎のおばあちゃん一人で、学費の工面に苦労してるんでしょ。良い話しだって思うんだけど」

「それはそうだけど・・・」

確かにそうだった・・・。いつも学費の工面に苦労させてしまって、山を処分するって言ってるし・・・。

幼い頃から山菜取りやきのこ採りに父と祖母と登った山・・・私の大切な思い出の山・・・。

「ねっ。もしバレても金を返せとは言わないから。でも最大限に努力して私のふりをしてよ。

七瀬だって、バレて相手に訴えられるような事になったら困るでしょう？」

―――結局、美奈子に押し切られるように、この恐ろしい計画に私は協力することになった。

そうして、私は身代わりの花嫁となり、美奈子とすり替わった・・・。

そもそもなんで、すり替わらなくてはいけなかったか？

美奈子には、結婚を約束した彼がいて、只今　同性中・・・。

その彼の家は普通の家庭だから、融資なんて期待出来ないし・・・。

で、その実業家と一緒には住めない状況というわけだ・・・。

そして、私は彼氏いない歴２１年・・・。

だから１年間、時間を拘束されても構わないでしょう？だって！！

「美奈子ったら、酷いじゃない・・・」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

美奈子の屋敷にお迎えの車が来て、そこから夫になる人のマンションに行き、今日からそこで暮らす・・・。
応接間で、２人並んでコンソールテーブルの上の鏡に姿を映してみる。
「こう並んでると、体形も身長も同じぐらいで、やっぱり似てるわね・・・私達・・・」

「でも、やっぱり一瞬間違われても、普通他人って分かるわよね・・・」

「大丈夫!!彼には絶対にばれないって・・・」

「でも、心配だな・・・」

「そんな弱気でどうするの!!お願い頑張ってよね!!」
手を組んで祈る姿の美奈子・・・。
天真爛漫で、まるっきり人事みたいな様子に何となく、ちょっと小憎らしい気がしてきた・・・。

「そうそう・・・。これを・・・」
そう言って、美奈子は自分の指から婚約指輪を抜いて、私の薬指にはめた・・・。
「じゃあよろしくね!!」
そう言って、美奈子は普段着に着替えて消えていった・・・。

「うわっ。ドキドキしてくる。本当に大丈夫なのかな?」

その時、コンコン・・・。とドアをノックする音が聞こえた。

「美奈子・・・」
今日から夫になる、鳳信哉　（おおとり　しんや）　だ。
２８歳の青年実業家・・・両親は早くに亡くなってしまい、家族はいない。
彼は、１８歳の時にウィルス性の網膜の病気になり、失明・・・。
今はアイバンクに登録中で、網膜移植の順番待ち中だ。
移植したら、見える可能性が大きい・・・。
光は感じるが、目は見えない。

やだ・・・。どうしよう・・・・・。ドキドキする・・・・。
「はい」
私はドアを開けた。

写真では見たが、実物を見るのは初めてだった。
栗色の緩い天然がかったウェーブのついた髪の毛・・・。色白で、デッサンの時に書く石膏の像みたいな、綺麗な気品ある顔立ち・・・。
長いまつ毛・・・。
背も高くて、まるで貴公子の様・・・・・。
ついボーッと見とれてしまった・・・。

ステッキをついて、部屋に入って来た。
椅子につまづきそうで、慌てて手を差し伸べた。
「危ないです」

「ありがとう・・・。君は誰？」

「やだ・・・美奈子ですよ」
うわっ。もうばれてるみたいじゃない・・・。
心の中でつぶやく。

「え・・・。本当？　この間会った時となんだか雰囲気が違う気がしたよ。ごめん」

「いやだ・・・。信哉さんったら・・・」
我ながら、白々しい演技だったかな・・・。

「ソファーに座りますか？こっちです。どうぞ」
手を引いて、案内した。

「ありがとう。優しいね」

「そんなこと・・・。大した事してませんよ」

「でも、よく僕と結婚する決心したね。目が見えないと、嫌がって、逃げられるのが当り前でね・・・」

「そんな事・・・」
なんだか、可哀想に思えて来た・・・。
私、物凄く酷い事してるんじゃないかな・・・。

「まあ。いいや・・・」
何か言いたげだったけれど、やめた感じの信哉・・・。

「あの・・・。私、まだ学生ですし・・・。その・・・。卒業するまで、待ってもらえますか？」

「ん？」

「あの・・・。だから。その」

「ああ。夜の事？」

「は・・・い」

「分かってるよ。僕は急がないから・・・。その気になったら、合図送ってよ」

「はあ。合図って・・・・」

「ハハハ・・・。君って面白い子だね。分からなかったよ。卒業して結婚式が済むまでは待つから安心して。
でもさ、お願いがあるんだけど・・・」

「え・・・。なんですか？」

「卒業するまで我慢するけど、僕は目が見えないから声を聞いて、触れていないと君の存在を感じる事が出来ないんだ。
君を傍で感じていたいから、夜は僕の隣で一緒に寝てよ。絶対に襲わないからさ」

「えええぇーっ。」
あまりの驚きに、つい変な声が出てしまった。
どうする？どうするのよ？？　七瀬・・・・。

「・・・・・」
暫くの間静寂が続いた・・・・。

「卒業したら結婚するのに、ダメなの？」

意を決して・・・。
「分かりました。でも、絶対に、卒業するまでダメですよ。何もしないでくださいね。　約束してくれなかったら、離婚しますからね」
「ははは・・・。離婚されちゃ困るから、約束するよ」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

彼はさすが、実業家だけあって、車はベンツのリムジンで運転手付き・・・・。
家は・・・・。六本木の超高級高層マンションの最上階・・・・。
しかもワンフロアー丸ごと・・・。

通いの家政婦さんが2人と、住み込みの家政婦さんが1人。
通いの家政婦さん2人は、30歳前後ぐらいで、部屋の掃除や洗濯など、雑用をしてくれる。
住み込みの家政婦さんは50歳代の芳枝さん、お料理とか家の事全般をしてくれる。

家政婦さんがいるなんて・・・。こんな豪華な家に住むなんて・・・。初めてな事ばかり・・・。

「この部屋を君の部屋にするといいよ」
30畳ぐらいあるだろうか・・・・。豪華なシャンデリアが下がっていて、大理石の床、住めそうなぐらいのウオークインクローゼットもある。
「あの・・・。美大生なので、この部屋をアトリエに使っても良いですか？」
「どうぞ、自由に使って」

「ありがとうございます」

「芳枝さんに聞いたけど、荷物がバッグ一つ？」

「は・・・い」

「なんだかいつでも逃げられそうな身軽さだね」

ドキッ！！！

「いやぁ・・・。家具は好みの物を少しづつ揃えたらいいかなーって思いまして・・・。服は元々実用主義であまりお金かけない人なので・・・」

「そうなんだー。まあ、家具も服も、僕が色々買ってあげるよ」

内心『いやあ、それは困ります・・・。』って思った・・・。色々買わせて、バレた時に後で高額の損害賠償請求されたら恐ろしい・・・。

「いいですよ。あまりお金使わないで下さい・・・。私、質素なのが好みなので・・・」

「ふーん。　でも遠慮しないで・・・。それに色々財界人とかの交流もあって、あまり地味な服は困るから・・・」

ひぇー。財界人の交流会？？　どうしよー。

「はぁ・・・」

「美奈子は何だか質素な庶民っぽい子って感じで、とてもお譲様っ

て雰囲気がしないね」

ドキ！！ドキドキ！！

『ごもっともその通りなんです・・・』

何だかバレるのも時間の問題って感じ・・・・。

早くも泣きたい気持ちになって来た・・・。

「実は、父の会社ですが、会社の方が傾いてきてる様な有り様で、うちは結構質素な生活してるんです」

って言っておこう・・・と口から出任せを言った。

「そうなんだ。その事は、協力させてもらうよ。大切な奥さんの実家になるからね」

「ありがとうございます。父がとても喜びます」

「今日は疲れたでしょう」

「はい」

「先にシャワーして待ってるから、後から来てね」

「え？」

「寝る時は一緒に寝てくれるって約束したじゃない」

「は・・・あ。でも、絶対に約束守ってくださいね」

いくら襲わないって言っても、なにも無かったとしても、何だかもうお嫁に行けない気持ちがして来た。

他人の男の人とひとつベッドで寝るの？

ストレスたまりそう・・・・。

1千万の為だ・・・。開き直ろう・・・。もし変な事したら即離婚しよう。その前にひっぱたいて、蹴飛ばして・・・・。

「わかってるよ。約束だからね」

そして・・・・。

いくら相手が目が見えないと言っても、パジャマって言うのもなんだか危ない気がしたので、愛用の若干年季のはいった、ヨレヨレのジャージ上下を着て寝室に向った。

気持ちを静めてから、ドアをノックして、おずおずと部屋に入って行った。

ドアを開けたら・・・。なんて広い部屋・・・・。窓からは美しい夜景が一望出来た。

「うわぁ・・・・。綺麗・・・・」

彼は、広いベッドにいた。

「こっちにおいで・・・」

「はい・・・」

「僕は目が見えないから夜景を楽しめないよ」

「凄く綺麗です。東京タワーがこんなに近くに・・・。わあ・・・。そう・・・。まるで、夢の楽園のような・・・。心臓がドキドキしてきます」

「オーバーだな」

「だって！本当に綺麗で、こんな美しい夜景を見ていると、幸せー

！！！って気持ちになります」

「ふふふ・・・。君って面白い子だね」

「隣においでよ」

「はあ。し・・・失礼します」

ふわふわの羽毛布団をそっと上げて、そうっとベッドの中に入った。

彼は高級ブランドの高そうなパジャマを着ていた。

淡いブルーの上品なチェック柄・・・。

「ねえ。夫婦なんだから、抱きしめてキスぐらいは良いでしょう」

「ええっ」

美奈子ー。そんな話聞いてないよ。どうしてくれるの・・・。

「だって結婚を承諾してくれたあの日だって、誓いのキスをしてくれたじゃない」

そんな事知らん知らん。　美奈子ったら・・・うそっ！キスしたの？

信哉さん、あなたがキスした相手は本物の美奈子ですよ。私は偽美奈子ですーっ！

「いいでしょ」

「それ以上は絶対にダメですよ！」

「うん」

彼は優しく抱きしめて、優しくキスをした。

「おやすみ」

「お・・・おやすみなさい」
心臓は破裂しそうなぐらいバクバク・・・・・。
過呼吸で死にそうな気分だった。
実はこれが私のファーストキスなのよ・・・・・。えーん。奪われた・・・。

「ねえ、抱きしめて寝るぐらいは良いでしょう」
そう言って、抱きついてきた。

私は石ころのようにくるっと背を向けて、ひたすら固まり続けた・・・。

「・・・・・」

「!!」
何か違和感を感じた風の信哉さん・・・。
「ねえ。このパジャマ・・・もしかして、ジャージ?」

ウワッ!バレた!!
「はい。いつもこれで寝てます」

「言ってみれば新婚なのに味気ないなぁ・・・・。可愛いの買ってあげるから、今度はそれ着てね」

「え?私これが好きなのに・・・」

「だめ、新婚なんだから・・・」

し・・・新婚?
「はあ・・・」

「君の髪の毛の良い香りがする」

「・・・・・・」

「もう寝ちゃたの？」

「・・・・・・」

ひたすら寝たふりをした。

実は寝れる訳ないよ。

こんな事が毎晩続いたら、私寝不足で倒れちゃうかも・・・。

香水なのか？彼からはとっても良い香りがした。そして、体温が伝わってきて、とっても温かかった・・・。

こうやって、身代わりの花嫁の第1日目はなんとか終った。身代わり終了日まであと364日・・・。

先は長いよーっ。（＜＿＞）えーん。

（第2話に続く）

第2話　美術館デート

今まで男の人と付き合った事もないのに、例え夫婦の契りがないとは言え、いきなりひとつベッドの中で一緒に寝る事になるなんて！！私にはハードルが高すぎる！！そう思っていたのに・・・。
毎晩寝れない日が続くかなと思ったけれど、彼は優しく紳士的な人で、約束を守ってくれて、決して狼には変身しなかった。

やがて、だんだん警戒心も解けて、反対に、毎晩ベッドの中であれこれお喋りする事が楽しくなってきた。
私って変だ・・・。
一緒に寝る事が楽しみだなんて・・・。

今夜も・・・・。

「明日は休日だな。何しようか？」

「美術館に行きませんか？」

「僕は目が見えないから・・・・」

「渋谷に、視覚障害の人の為の、手で触れる事の出来る美術館があるんですよ」

「えーっ。それなら僕でも楽しめそうだな・・・」

「でしょ・・・。ねっ。行きましょう・・・」

「うん」

「じゃあもう寝ましょうか？」

「うん」

いつも寝る時は、彼がふんわりと抱きしめて、そっと優しく唇にキスが日課だった。
初日は大変驚いてドギマギしたけれど、慣れと言うのは恐ろしい物だ・・・。
最近は、なんだかそれが嬉しいような・・・・。
それが無いと淋しいような・・・。
心にポッと明かりが灯るような気持ちになる。
私は偽の花嫁なのに、だんだん、彼の事が好きになってきたのでは無いかって気持ちになって来た。

「おやすみなさい、信哉さん」

「おやすみ、美奈子」
私、本当は七瀬なんですって心の中で呟いた・・・。

彼が私の存在を感じ取れるのは、声と生活音とぬくもり・・・。
だからいつも抱き枕のように抱きしめられて眠りにつく・・・。
温かで広い胸・・・ほんのりと香る甘く爽やかなコロンの香り・・・。
こうされる事に心の何処かで喜びのような幸せを感じてしまっていた。そんな事許されるはずないのに・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌日、信哉が電車に乗ってみたいと言うので、徒歩で六本木駅に歩

いていった。
住んでいるマンションは、六本木の駅から徒歩で数分なので、電車に乗るのにも結構便利だ。
今まで分からなかったけれど、目の見えない人はその生活に結構慣れているので、あまり気を使い過ぎる必要も無く、コツを覚えれば、それ程大変と言う事も無かった。

「行きますよ」

「うん」

彼は私のヒジを掴んで、私は少し彼の前方を歩く。
歩く早さはそれ程落とさなくても大丈夫・・・。
大事なのは、彼の横に人二人分のスペースを確保する事・・・。
そのスペースがとれない場合は、「狭くなりますよ」と声をかけ、歩調を落とすと、彼が私の真後ろを歩くようにするので、狭い道も大丈夫。

段差や階段の時などは、一声かけて、彼が私の上下を察知して、位置確認してくれる。
「あと2段です」「ここで終りです」って一声掛けたら大丈夫。
エレベーターの時は「乗りますよ」「降りますよ」って声をかけて・・・。

「信哉さん美術館に着きましたよ。階段昇りますね」

「うん。楽しみだな」

信哉さんはあまり、美術には触れた事が無い様子だったが、とても

楽しそうだった。

「いままで、あまり芸術的なものには関わる事が無かったけれど、凄く楽しいよ」

「喜んでもらえて嬉しいです。美大生だから、芸術的な事に関しては、色々教えてあげられると思いますよ」

「うん。ぜひ頼むよ」

「任せてください」

「私ね。信哉さんと出会ってからやりたい事が見つかりました」

「えっ？何だろう？」

「いつか・・・誰もが楽しむ事が出来るような美術館を作りたいなって夢が出来ました」

「面白そうだね・・・どんな美術館だろう？」

「目で見て楽しめて、手で触って楽しめて、音や香りでも・・・。健常者でも障害を持ってる人でも・・・誰でも一緒になって楽しめる美術館です」

「へえ・・・素晴らしいね。僕も沢山楽しめそうだな・・・。その時には資金援助は任せてよ・・・」

「い・・・いいえ・・・だめです」

「え・・・なんでダメなの？」

「自分の力で作りたいんです。売れる画家になれるように一生懸命頑張って、沢山絵を売って、コツコツ資金を貯めて・・・。初めは小さな・・・掘っ建て小屋ぐらいでもいいんです。1坪ぐらいの小さな場所から始めて・・・少しづつ大きくしていければ・・・」

「なんか美奈子は洋服も何もかも欲しがらないし・・・。本当に欲の無い子だな・・・。君の夢の実現の力になりたいんだから遠慮せずに甘えて欲しいな・・・。そうじゃないと淋しいじゃないか」

「淋しい？」

「もっと甘えて欲しいよ」

「ごめんなさい」

「別に責めてる訳じゃないけど・・・」

「はい」

「今ごめんって謝ったんなら、今日は僕にプレゼントさせて・・・」

「えっ？」

「頼られて甘えて欲しいんだよ・・・。こんな体だから、いつも人に世話になる方が多いじゃない？だから・・・頼られてもらいたいんだ・・・。君に喜んでもらいたいんだ・・・。だから、嫌って言わないでくれよ」

「は・・・い」

「じゃあ甘えて・・・」

「ええーっ。そう言われても・・・」

「じゃあ思いっきりショッピングに行こう・・・。もう遠慮して要らないって拒否しないでよ！」

「はぁ・・・」

あれから運転手付の車が呼ばれ、信哉さんご用達のデパートに行き、VIPルームに連れて行かれ、結局ものすごい数の服やら靴、バッグ、装飾品、着物、フォーマルドレスまで・・・買って貰ってしまった・・・。

私に「気に入った？」って聞くと遠慮されると思ったのか？

店員さんがセレクトした物を全部並べて、「この中ですごく嫌いな物とか、苦手な物ってあるかな？」って聞かれたから、「いいえ特にありませんが・・・」って答えたら、「じゃあ全部」って・・・。

驚いて声が出なかった・・・。

「そ・・・そ・・・そんなぁ・・・」って言ったら、すごく悲しい顔をして「嫌なの？」って言われて・・・。

何も言えなくなってしまった・・・。

悲しい顔をされると心が痛くなって・・・何も言えなくて・・・。

観念して「こんなに良くして下さって、すみません」って言ったら、嬉しそうに「気に入ってくれた？」って言うから「もうすごく気に入りました」って答えた。

顔がパーッと明るくなってすごく嬉しそうに笑った。

その笑顔が眩しくて・・・そして心がとっても痛かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あんなに買わせてしまったのにはとても心が痛んだけれど、美術館デートはとても楽しかった・・・。

信哉と言う人を知れば知るほど、純粋で、優しくて、大らかで・・・。何でこんな素晴らしい人との結婚を嫌がり身代わりを頼んだのか？美奈子の考えが理解出来ない気持ちになった。

その気持ちが膨らむと同時に、こんないい人を騙している自分が情けなく、恥ずかしく、罪悪感で押しつぶされそうな気持ちになった。だから、一緒にいられる間だけでも、いっぱい楽しませてあげたい・・・。喜ばせてあげたい・・・。尽くしてあげたい・・・。そう思った・・・。

（第3話に続く）

第3話　海へドライブ

あれから七瀬は、自室のクローゼットを開ける度にため息が出た・・・。

『もうすごく気に入りました』なんて言って喜ばせてしまったもんだから・・・。

「奥さんに似合いそうですよって言われてね・・・ つい買ってしまったんだ」って、嬉しそうな顔をして度々色々な物をプレゼントされ・・・・・。

こんな私の為にもう1円でも使って欲しくない・・・ って思った。

何か頂く度に心が疚しくて、信哉さんに申し訳なさすぎて、とても使う事が出来ない・・・・。

お手伝いの芳枝さんは、余計な事は一切言わないけれど、おかしいなって思ってるはず・・・・。

だって買って貰ったもの一切身に付けずにクローゼットに入ったままで・・・・。

いつも自分で持ってきた安物の服しか着てないし・・・・。

そしてとうとう車までプレゼントされてしまった・・・・。

「美奈子は車の免許はもってるのかい？」って聞かれた時に、気がつけばよかった・・・・。

なんて私って鈍いのだろう・・・・。

美奈子名義にするって言われて、「信哉さん名義の車の方が守られてるって安心感があるし、運転に気をつけようっていつも心がける事が出来ますから・・・」って何とか断った。

思い切って、「もう十分すぎるぐらい頂きましたし、私の為にもうそんなにお金を使わないで下さい。お気持ちだけでありがたいんですから・・・」って伝えた。

その途端、信哉がフッと悲しそうな淋しそうな顔をした・・・。
「美奈子の気持ちも聞かずに一方的に押し付けて、迷惑だったかな？」

信哉さんの気持ちを傷つけてしまった！って心が痛んだ・・・。
「ううん。そうじゃないんです・・・。信哉さんが私の事を思って下さるお気持ち、凄く伝わってますし・・・とっても嬉しいです。でも、あまり頂くと申し訳なく思って来て・・・心苦しくて・・・。だから、お気持ちだけで十分ですよ・・・私、一緒にいるだけで楽しくて幸せですから・・・」

「本当の事を言うとね・・・何かね・・・とても不安なんだ。美奈子の事を知れば知る程、どんどん好きになってきて、もう離れられないって思ってる。こんな体の僕にいつか愛想をつかしていなくならないかって不安になるんだ。卑しい気持ちと言うか、物でつなぎ止めておきたいってそんな気持ちがあったのかも知れない・・・」

「私・・・いなくなりませんから」
信哉の体を抱きしめて、「ほら・・・ここにいますよ。ずっと側にいますから・・・」と言った。
そう言いながら心はズタズタだった・・・。
こんな純真無垢な素晴らしい人を・・・私はなんて人なの・・・！！
自分が嫌で嫌でたまらなかった・・・。

「約束だよ・・・」
「はい・・・」

信哉さんごめんなさい・・・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「ねえ、信哉さん。休みの日に二人でドライブに行きませんか？」

「ドライブ？」

七瀬は何か喜ばせてあげられる事はないかなと思い、あの買ってくれた車でドライブを思いついた。
車の運転は、学校が長い休みに入ると、生まれ育った岩国の田舎に帰って、伯父の軽トラを運転して農作業を手伝ったり、買い物に出たりしてまあまあ自信があった。
運転手を買って出て、レンタカーを借りて、大学の友達と何度かドライブに行った事もあった・・・。

「運転手付のリムジンじゃ何だか落ち着かないし・・・。ドライブって雰囲気もしませんし・・・。
せっかく素敵な車を買って下さったから、これから休日は沢山、二人で色々な場所に出かけてみませんか？」

「楽しそうだね。」
信哉の顔がパッと明るくなってとても嬉しそうに笑った。
七瀬は信哉の嬉しそうな顔を見て、気持ちが軽くなり、嬉しく思った。

「信哉さん、行きたい所ありますか？」

「海に行きたいな」

「了解です」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ーーー2人は、南房総　野島崎に出かけた・・・。
砂浜にレジャーシートを敷き、2人並んで座って、広い太平洋の海をぼんやりと眺める。

「信哉さん、潮の香りがしますね」

「本当に・・・。風が違う・・・」

「えっ？どんな風に？」

「海風は塩を含んでるからか、何か重いって言うか、ちょっとベッタリした感じで・・・。いつも感じている風とは違うね」

「確かに・・潮風ですぐに車の窓が汚れてここに来るまでに何度ウォッシャ液で洗った事か・・・」

「でも、ミネラルが含まれてるって感じで、思いきり吸い込むと肺が浄化されるような、清められる感じがするな」

「本当です。思いっきり沢山吸っておこう・・・」

「その勢いだと、地球全部の酸素が奪われそうだよ・・・。僕の酸素までとらないでよ」

「もう。信哉さんったら！」

「あははは・・・」
「ふふふふ・・・」

「信哉さん、水平線がまあるく見えてる。地球は本当にまあるいんだなぁー。って、感じます。信哉さんに見せたいな」

「羨ましいな」

「信哉さん人さし指を出して・・・」
私は信哉さんの指で、大きな水平線をなぞった。
「分かる？こんな感じ・・・」

「うんうん。分かる・・・。本当にまあるい・・・」

「ここと、ここと、ここにタンカーが・・・。　ここには小さな漁船・・・。　それからここには真っ白い可愛い灯台が・・・」

「何となく見える感じがするよ」

「本当？良かった」

「いつか順番が回ってきて、角膜移植出来て、目が見えるようになったらまた一緒に来ようよ」

「はい。約束・・・」

二人で指切りげんまんした。

七瀬は心の中で呟いた。
『信哉さんゴメンね。あなたの目が見えるようになった時には、き

っと私はあなたと一緒にいられないかも・・・。
この日の事・・・。今まで一緒にいた時間・・・。全部忘れませんから・・・』

季節は7月・・・。もう間もなく海開きがやって来る。
身代わり終了日まであと３３４日・・・。
信哉さんごめんなさい・・・私もう・・・辛くて・・・・。

（第４話に続く）

第4話　憧れの先輩

美大の学食で、美奈子にこの間のドライブの事を話していた。

「でね、凄く喜んでくれたみたい・・・。また来ようねって指切りまでしたし・・・。でも、もうそんな事は無いかも知れないけれど・・・。心が痛むな・・・」

「何だか、七瀬ったら本当に好きになっちゃったみたいだね」

「もう・・・。美奈子ったら・・・。それよりも良心が痛んで、このままだと病気になっちゃいそうよ」

「毎晩一緒に寝てるんでしょ」

「でもね、本当に紳士で、ちゃんと約束を守ってくれて・・・」

「もしかしたら、あっち系がダメなんじゃないの？」

「え？」

「だって！普通考えられないでしょ。　ご馳走を目の前にして何もしないだなんて・・・」

美奈子って何でこうも下品と言うか、何と言うか・・・。そう言う事を言うのかな？

なんだか最近、美奈子に嫌気がさして来た気分・・・。

「信哉さんは純粋で優しくて、器の大きな人だから、相手の人がそう言う気持ちになるまでいつまでも待てる人なんだと思うよ・・・」

「ふーん」

「まあそんな話しどうでも良いじゃない。後少しで午後の授業が始まっちゃうよ」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

七瀬は油絵学科で、授業の後居残り、絵の続きを描いていた。
あの南房総の海のイメージをキャンバスいっぱいに鮮やかに描いていた。

その時、後ろから声がした・・・。

「良い絵だね」

「あ・・・。羽生先輩」
羽生先輩は、油絵学科４年で、大きな展覧会に何度も入賞した事のある才能溢れる素敵な先輩だ。
少し信哉さんに似てる感じがする。そして、私がずっと憧れている先輩・・・。

「これは？どう言うイメージで描いたの？」

「この間、南房総の海に行って来て、その時感じたイメージを描いてみたくなって・・・」

「色合いが凄くいいね。なんだか弾ける感じって言うか・・・。生命力溢れるって言うか・・・」

「ありがとうございます」
「ねえ。今週の土曜日、暇？」
「えっ？」
「上野の美術展に良かったら一緒にいかない？」
「ええっ。嬉しいな。いいんですか？」
「丁度チケット2枚あるし・・・。なんて、実は北城さん誘おうと思って入手したんだけどね」
「えっ？」
七瀬は頬を染めて、はにかんだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

居残りで絵を仕上げて、家に帰ったのは午後8時を回っていた。
「お帰り。遅かったね・・・」
信哉がすぐに玄関まで出迎えてくれた。
家の中の地図は頭の中に完全に入っているので、スムーズに動きまわる事が出切る。
一番重要なのは物を移動させたり、むやみに物を置かない事・・・。
ちょっとした不注意でつまづいたり怪我に繋がる事もある・・・。
「ごめんなさい。絵を仕上げたくて、学校に居残ってました」
「美大生も大変だね・・・」

「あの・・・。今度の土曜日、用事があるので出かけますね」

「何かあるの？」

「学校の先輩に、美術展に誘われて・・・」

「まさか男じゃないよね」

「いやだなぁ。女性の先輩ですよ」

「冗談だよ」

そう言いながら、ちょっと淋しそうに見えた。

「もう。いやだなぁ」

信哉さんゴメンね！！

でも、あなたとは、ずっと一緒にいられないから、好きになりすぎないように、心に壁を作らないと・・・。

「今日の美奈子は何だか元気ない感じだね」

「え？そんな事・・・。　絵に没頭してたから疲れちゃったのかしら？」

なんだか心の中を見透かされているみたいで恐いな・・・。

「信哉さん、もう　ご飯食べましたか？」

「ううん、待ってた」

「ええっ大変！！　お腹空いたでしょう・・・。待ってなくても良かったのに。ごめんなさいね」

信哉さん。そんなに優しくしないで・・・。

心が痛くて辛いよ・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

土曜日の日、七瀬は身支度をして出かける所だった・・・。

「じゃあ、いってきますね。きょうは遅くなるかも知れないから、先にご飯食べてて下さいね」

「え？そんなに遅くなるの？」

「あの、だって、仲良しの先輩だから、もしかしたらご飯食べながらお喋りに花が咲いたりするかもしれないし・・・」

「ふーん。なんか淋しいな・・・」

「遅かったら先に寝てくださいね」

「え？そんなに遅くなるの？」

「万が一です・・・。今日だけですから・・・・」

「いいよ。分かった」

「じゃあいってきます」

「いってらっしゃい。」

玄関のドアを閉めたあと、物凄く良心が痛んだ・・・。

信哉を突き放すような態度だったのではないか・・・冷たかったの

ではないか・・・傷つけてしまったかなと気になった。
でも・・・本当に結婚している訳じゃないし、どうせいつかはお別れしなくてはいけない人なんだから、割り切ったほうが良いのよ。うん。これでいいんだ。

憧れの先輩に誘われて、初デートみたいな感じなのに。
なんだかあまり楽しくなかった・・・。
どうしてかな？

だんだん、身代わり妻になってる事が辛くて嫌になってきた・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

羽生先輩との待ち合わせは、上野公園口　改札口。

「15分前に来ちゃった」
早いかなと思ったのに、先輩はもう来ていた。
「先輩、早いですね」

「その・・・。先輩はやめてくれないかな。出来たら名前で呼んでよ」

「え・・・っと・・・」

「剛志（たけし）で・・・」

「はい。剛志先輩」

「やっぱ。先輩か・・・」

「ふふふ・・・。つい言っちゃいます」
お互いに顔を見合わせて、微笑み合った。

「じゃあいこうか」

「はい」

「手を繋いでも良い？」

「えっ・・・あ・・・じゃあ」
先輩の手は大きくて、少しひんやりしてた。
信哉さんの手は、大きくて、柔らかで温かい手だったな・・・。

同じ油絵科だけあって、話しは盛り上がって、尽きる事が無く、時には大笑いし合った。

「七瀬ちゃんって、ちょっと天然で可愛らしくて飽きない子だね」

「えっ、そうですか？　天然はいってます？」

「うん。かなり・・・」

「剛志先輩は、落ちいてて大人で、癒されるキャラですよね」

「え、癒されてる？」

「はい。かなり・・・」

二人で美術館を回った後は、不忍公園を散歩したり、楽しい1日を過ごした。

剛志先輩は、優しくて、楽しくて、いい人だ・・・。
でも・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

帰る時間となり、先輩と駅構内でお別れのあいさつをする。
「今日はとても楽しかったです」

「こちらこそ・・・。すっかり遅くなっちゃったけど大丈夫？」

「はい」
ちらっと信哉の事が頭によぎった・・・。どうしてるかな・・・。

「家まで送ろうか？」

「だ、大丈夫です。近いですから・・・」
内心それは困ります・・・って思った。

「家は何処なの？」

「六本木です」

「ええっ。随分良い所に住んでるんだね」

「ワンルームの安マンションですよ」
自分でそう言いながら、うそうそ・・・って思った。心が痛む・・・。

「今度遊びに行ってもいい？」

「そ・・・それは困ります」

「七瀬ちゃんらしいや。真面目だよね」

「そうですか？」

男の人を家に呼ぶのは抵抗があるのも確かだけれど、本当の理由は呼べないんです。

ひとつの嘘からどんどん嘘が塗り固められていく・・・。

いつからこんな人間になってしまったんだろうと、気分が落ち込んだ。

「また今度デートに誘ってもいいかな？」

「は・・・はい」

「じゃあ電車反対側だから・・・。気をつけてね」

「剛志先輩も・・・」

「今日は楽しかったよ！ありがとう・・・。またね」

「私もとっても楽しかったです」

お互いに笑顔で手を降った。

別れた後、どっと疲れた・・・。

今日はなんだか、家に帰りたくないな・・・。

やましい気持ちで、信哉さんの顔がまともに見れない気分だ・・・。

でも、あまり遅くなると心配するし・・・。

帰らないと・・・・。

間もなく7月末・・・。８月１日から夏休み突入だ・・・。
身代わり終了日まであと３２０日・・・。
もうこんな事、続ける事出来ない・・・。心が悲鳴を上げ始めて、
限界まで来ていた・・・。

（第５話に続く）

第5話　もう限界

あれから剛志先輩から何度かお誘いはあったが、色々用事があると言って断り続けた。
いくら身代わりの花嫁だとしても、信哉を裏切るのは心苦しく辛かった・・・。
それになにも知らないで何かと親切にしてくれる、剛志先輩にも申し訳ない・・・。
私に好意を持ってくれている剛志先輩の気持ちに甘えているんだ・・・。

剛志先輩はとってもいい人だ。
一緒にいると楽しくて、その気持ちは多分、恋愛感情と言うよりも憧れの先輩・・・。と言う感じだけど、もし、このままお付き合いしていけば、やがて、友情が愛情に発展していきそうな、そんな予感もする。

今は多分、剛志先輩よりも、信哉さんの事を思ってると思う・・・。
それは多分、恋する気持ちだと・・・。
でもこれは許される事ではない・・・。お金の為にあんなに素晴らしい人を騙して、愛される資格なんてない。
この気持ちは封印しなくてはいけないのだ。

揺れる気持ちの中で、七瀬はもう限界にきていた。
美奈子から話しを持ちかけられた時、なんではっきりと断れなかったのだろう・・・。
1千万円というお金に目が眩んで、自分はなんて浅ましい人間だったのか・・・。
あまりにも恥ずかしすぎて、透明人間にでもなって消えてしまいた

くも思った。

丁度その頃、祖母から実家の山を処分したと連絡が入った。
結構な金額になる。
幼い頃から沢山の思い出が詰まった山・・・亡くなった父との思い出も沢山ある。
おばあちゃんと父と三人で、よく山菜取りやきのことりにも出かけたし・・・山ぶどうや木イチゴとりや・・・。
幼なじみ達と秘密基地を作ったり、時には猿や猪、野うさぎ、タヌキにも出くわしたり・・・・。
人手に渡ってしまって、山に入る事が出来なくなり、もしかしたら近い将来には山の形状も変えられてしまうかも知れないと思うと淋しくて悲しい・・・・。
でも、そうなってしまったら諦めもつく。
沢山の思い出は心の中に忘れないように、とどめておけばいいのだ・・・。

金銭的な心配も消え、これなら諦めていた大学院まで進めそうだ。
祖母も遠慮せずに自分のやりたい事を思いっきり頑張りなさいと勧めてくれた。
アパート家賃や、画材などの費用にも困らないだろう・・・。
元々美奈子から受け取った、報酬金（1千万円の小切手）は、一切手を付けてなかった。
お金を返して、この事は終りにしようと決心した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

もう終らせようと思ったら、なんとなく信哉に対する態度がよそよそしくなってきてしまった・・・。

「ただいま」

「美奈子遅かったね・・・」

「ごめんなさい。最近課題の絵の仕上げで忙しくて・・・。最近大学院にも進学したいなって思っている所なの」

「大学院に？最近休日も殆ど家にいないね」

「先輩とのおつき合いとか色々あって・・・」

「声に元気がないみたいだね・・・。疲れてるような感じがするけれど大丈夫？」

そう言って声のする方に手を伸ばし、七瀬に触れようとしたのを七瀬はスルリとかわした。

「うん。大丈夫・・・。心配しないで」

「最近、家でも深夜まで絵を描いてて、一緒に寝てないし、淋しいな・・・」

「ごめんなさいね」

「なんだか、幻みたいだな・・・」

「え？」

「目が見えないから、君の姿を見る事は出来ないし、最近、触れた事が無い気がしてる・・・」

とても不安そうな様子に心が痛くなる・・・。

「そんな事ないでしょ」
そう言って七瀬は、信哉の手に自分の手を優しく重ねた。
「ここにいるでしょ」

「抱きしめてキスしていい？」

「うん」
七瀬が信哉に身を寄せると、信哉は宝物のようにふんわりと抱きしめて、そっとキスした。
ゴメンね、信哉さん。
涙が流れた。

「泣いてるの？」

「まさか・・・。気のせいだって・・・」
慌ててゴシゴシと目をこすった。
もう限界だよ・・・・。一緒にいられない・・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

次の日、美奈子を呼び出して、この事を終りにしたいと話しを持ちかけた。
ラッキーな事に美奈子は今の彼と破局を向えていた。
さらに、美奈子の実家の事業も、多少信哉さんから援助は受けたものの、自力で持ち直しつつある所だった。
私は封筒に入れた1千万円の小切手を美奈子に渡した。
「ごめんね、私、もう限界・・・これ以上は無理だから終りにさせて欲しいの」

「私こそ、とんでもない事頼んで、悪かったわね。
元彼のあいつ・・・とんでもない奴で、うちの実家の財産狙っていたのよ・・・。会社が危ない状況だって知ったら、手の裏を返す様にガラリと態度が変わっちゃって・・・。凄くむかついたわ。
目の不自由な信哉さんの妻になって支える自信は無いけれど、とにかく会ってみるわ。実家の方も援助してもらったお陰で何とか会社持ち直したし・・・。恩人だものね」

真実を告げて謝ろうかとも思ったけれど、花嫁が入れ替わって、今まで彼を騙してきた真実をもし知ったら、どれだけ傷つくかと思うと、その勇気が湧かない・・・。
出来るだけ深い傷を負わせないで、この馬鹿げた事を終らせる方法はない物だろうか・・・。
美奈子とあれこれと話しあって、結局、2人入れ替わって、元通りの形になる事が一番だと言う結論になった。

「信哉さんは、純粋で心優しいとってもいい人よ。美奈子もきっと好きになると思う・・・。本当に素晴らしい人だから、そして寂しがり屋な所もある人だから・・・温かく包んで幸せにしてあげて欲しいなって思ってるの」

「なんか・・・信哉さんの事好きになっちゃった様に見えるのだけど・・・七瀬はいいの？」

「いいもなにも、こうしないと事実を知って、信哉さんが酷く傷つく事になったらと思うと・・・そうなる事の方が辛いわ」

「正直言うとね、妻になる自信無いんだけれどね、七瀬の話しを色々聞いたら凄くいい人みたいだし、とりあえず一緒に暮らしてみるわ」

美奈子の『とりあえず』と言う言葉が心に引っ掛かったが、きっと大丈夫！！って自分を納得させた。
だって本当に素晴らしい人だもの・・・。

「トラブルに巻き込んだお詫び・・・なにかしないとね」

「ううん。なにもしないで・・・私、いいお勉強したし・・・。お互いに、もう二度と馬鹿はやらないようにしようね」

「うん・・・。分かった・・・。ねえ、これからも友達でいてくれる？」

「勿論よ。」
一時、美奈子の事を嫌いになった時もあったけど、今日の素直な美奈子を見ていると、そんな気持ちも何処かに飛んでしまった。

「私、元々バッグひとつの身軽さで来たから、すぐに家を出れるから・・・。今日これから大きな荷物は運び出しておいて、明日の朝、学校に行く格好で私が家を出て、学校から帰って来たふりをして、午後はあなたが家にいって・・・そうやって交代しましょう」

「うん。わかった・・・」

「明日の朝家を出たら、私は七瀬に戻れるんだ・・・」
淋しいような、ほっとした様な・・・。

（第６話に続く）

第6話　さようなら信哉さん

その後、美奈子を連れて慌てて六本木のマンションに・・・。
今の時間、信哉は会社にいる時間で不在・・・。
月曜から金曜まで、いつも雇いの運転手が玄関前まで送迎し、朝８時３０分に出勤し、夕方６時頃戻って来る規則正しい生活。
優秀な部下達に支えられて、父親の起こした会社を引き嗣ぎ、輸入代行や、翻訳関係、不動産業、Ｍ＆ａｍｐ；ＡやＯＥＭ提携なども手掛けている。
あの穏やかで優しい雰囲気からは想像出来ないが・・・　とても優秀な人だ。

話は戻るが、芳枝さんと２人の家政婦さんに慌てて美奈子を紹介して、事情を話した。
いくら２人が似ているとは言え、他人の空似・・・　家政婦さん達には事情を説明しないわけにいかない。

勿論だが、非常に驚き・・・。そして明らかに、呆れた感じだった。
『全く今時の女子大生は・・・』と言う声が聞えて来そうな雰囲気だった・・・。

「一応黙っていますが、旦那様が不審に思ったら、事実を話しますよ」
ちょっと憤慨したようなような雰囲気の芳枝さん。

「はい・・・　それは当然だと思います」
ショボくれる七瀬と美奈子・・・。

それから慌てて七瀬の私物である、アトリエの絵や画材道具やこの

家に来る時に持ってきたバッグを運び出し、地下駐車場で待機していた美奈子の車に放り込み、美奈子の荷物を部屋に運び込んだ。
それから美奈子に、国分寺の元々七瀬が住んでいた安普請のアパートの鍵を預けて、荷物をアパートに運んで貰うよう頼んだ。
そして翌朝、怪しまれないように、小さなショルダーバッグひとつで出れるようにと準備した。
明日の午後、２人は入れ替わり、お互い元いた場所にもどる手はず・・・。

七瀬の心の中は、スッキリしない気持ちと言うか、モヤモヤしていた・・・。
本当にこれでいいのだろうか・・・ 最後の最後まで騙すような形で・・・。
でも、事実を知らせてどうなるの？
凄く傷つき、悲しみ、嫌な気持ちにさせてしまうだけだろう・・・。
この偽りの結婚を、嘘で始まって嘘で終らせるんだ・・・ そして、真実に変える・・・。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

その日の夜は、七瀬から信哉さんにハグして優しくキスをした。
「今日はどうしたの？」
いつもと違う雰囲気に、ちょっと驚いた様子だ。
「ううん。なんでもないの。いつもハグして貰うから、今日は私から・・・」
「なんだか嬉しいな。初めてだね」
頬を染めて嬉しそうな様子だ。

「本当？じゃあこれから時々そうしてあげるね」

「えー？時々なの？」

「もうっ。欲張りですね。じゃあ毎日・・・」

信哉さん、ごめんね。　これが最後のハグなの・・・。

嬉しそうな信哉の笑顔が心に突き刺さった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

そして朝がやって来た・・・。

六本木から学校のある国分寺までは、1時間前後と遠い・・・。なので、いつも七瀬の方が信哉よりも早く家を出る。

「じゃあ行ってきますね」

「うん。気をつけて」

「信哉さん、今までどうもありがとう・・・」

信哉と過ごす時間もこれで最後だと思ったら、感極まってついうっかりと口に出てしまった・・・。

「え？　なんだか最後みたいじゃないか」

「あ・・・。そうよね。　変ですよね。気にしないで。では、いってきます」

「うん。いってらっしゃい」

信哉は不安な気持ちになった。

「ねえ、芳枝さん・・・ 美奈子の様子変じゃなかった？」

「えっ？　そ・・・ そうでございますか？　気づきませんでしたが・・・」

「僕の気のせいかな・・・」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

久し振りに七瀬は国分寺の自分のアパートに戻ってきた。
時々は様子を見に戻って来てたけれど、それでも、郵便物が溢れていた・・・。

「うわっ、郵便物が・・・」

「あら・・・。北城さん、最近あまり戻って無いみたいだったけれどどうしたの？」
面倒見のよさそうな、５０代の大家のおばさんが心配顔・・・。

「すみません。課題制作で忙しくて、近所の友達の家に寝泊まりしてました」

「それならいいけど・・・」

「ご心配おかけしてすみません。課題の方も大体完成までのメドが付きましたので、これからは、もう家を空ける事も無いと思いますので・・・」

「若い女の子だから、親のような気持ちになって色々心配なのよ・・・。数日家を空ける時には、今度からは一声かけてちょうだいね」

「はい・・・。すみませんでした」

「じゃあね・・・」

「あ・・・大家さん・・・」

「なあに？」

「８月から大学が夏休みに入りますが、夏休み中、岩国の実家に戻ると思いますので・・・よろしくお願いします」

「分かったわ」

もうすぐ夏休み・・・なんだかどっと疲れが出て、母親代わりに育ててくれた祖母の顔が急に見たくなった。

「行く時にはまたご挨拶に伺いますので」

「よろしくね」

「また、お土産に大家さんの好きなわさび漬け買って来ますネ」

「ありがとうねー。あれ、美味しいのよね・・・。じゃあね」

「はーい」

なんだかホッとした時に携帯が鳴った。

「美奈子からだ・・・」

美奈子からは、六本木のマンションエントランス入り口まで一緒に来て欲しいとの頼みの電話だった・・・。

やっと久しぶりに国分寺のアパートに戻って来たのに・・・。
すっかり情が移って、好きになってきてしまった信哉と関わる事は凄く辛かった・・・。
本当はつき合いたくなかったけれど、美奈子もやっぱり不安だと思うし・・・。
今回の事に関与してしまった責任もあるし・・・ 渋々国分寺からまた六本木にとんぼ返りした・・・。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

六本木駅で美奈子と待ち合わせ・・・。
時間は信哉の帰宅時間を少し過ぎていた・・・。
「七瀬・・・ごめんね。信哉さんの反応とか色々考えるとすごく不安になってきて・・・」

「エントランス入り口までだよ。それ以上は勘弁してよ」

「やっぱりダメ？」

「当り前よー。信哉さんが私に気づいたらどうするのよ!! 私自身、申し訳無さすぎて合わせる顔無いし・・・」

「わかった・・・」

そう言いながら、美奈子とエントランス入り口までやってきた。

「ちょっと・・・。信哉さんが立ってるよ」
私は慌てふためいた・・・。
心臓が口からポーンと飛び出しそうだった・・・。
エントランス入り口に、美奈子の帰りを待っている様子で不安そう

に立っていた。
その姿を見たら、涙があふれた。
「なんだか可愛そうで、涙が出て来ちゃった・・・。美奈子、早く行って・・・信哉さんが待ってるよ・・・」

美奈子が近付いて「信哉さん・・・」と声をかけると同時に、信哉は美奈子を抱きしめた。

これで良かったんだよね。
信哉さん、お幸せにね。
美奈子・・・。信哉さんを傷つけないで！大切にしてあげてね。とってもいい人なんだよ・・・。

私はくるりと背を向けて、去って行った。
「バイバイ・・・。信哉さん。ありがとう・・・あなたと過ごした僅かな時間・・・凄く幸せでした。
さようなら・・・私のファーストキス・・・愛する人・・・」

身代わり終了・・・。
信哉さん、幸せになってね。（T＿T）

（第7話に続く）

第7話　帰郷

美奈子が信哉に抱きしめられる姿を見届けた後、すぐ近くの地下鉄入り口の階段を滑るように駆け降りた。
改札を通り抜けると、帰りの混雑でホームは人がひしめいていた。
帰りの電車の中も、帰宅ラッシュ時と重なり、車内は酷い混雑状態だった。

『なんかついてないなぁ・・・』ついぼやきたくなってしまう・・・。
揉みくちゃになりながら必死で吊り革に捕まり、ぼんやりと窓の外の流れる景色を見ていた。
自分の気持ちとは反して、明るく煌めく都会のネオン・・・。
『あのマンションの夜景・・・綺麗だったなぁ・・』
初めての夜、ドキドキしながら入った寝室・・・銀世界のように一面に広がる東京の夜景・・・。
パジャマ姿のふと優しい信哉の笑った顔が浮かんできて、胸がキュンとした。
泣きたい気持ちを必死に堪えて、ため息をひとつ吐いた。

久しぶりにポツンと一人で寝る、アパートの狭い部屋、シンプルな安物のシングルベッド・・・。
大学に入ってからずっとこのアパートで生活してきたのに、久しぶりの我が家は、なんだか他人の家みたいに落ち着かない・・・。そして寝れない・・・。
信哉さんの家は広くて豪華で素敵だっなぁ・・・。買ってくれた服やアクセサリー・・・一度も身に付けなかったな・・・。
自分にはとても手の届かない、高価な物ばかり・・・。あのかわいい服、一回ぐらい着てみたかったな・・・。

明日から美奈子が着るよね。あれらは私のものではない・・・全て美奈子の物・・・。信哉さんも・・・。
信哉さんと過ごしたあの時間は、夢物語だったのよね・・・。叶えられない夢は、いつかは覚めてしまうのよ。
気持ちを切替えて、明日から頑張らないと・・・。と言っても、明日から夏休みだったっけ・・・。

真夜中に携帯のバイブが鳴って、手を伸ばして携帯を見たら、美奈子からのメールだった。
『大丈夫・・・入れ替わった事ばれなかったよ・・・。 今、信哉さんとベットの中・・・ 彼はもう寝てる。求められたから応じちゃった（爆）』

このメールを読んだ途端にゾクッとして、心がズキッ！とした・・・。
頭を特大のトンカチで『ガーン！』と殴られたみたいだった・・・。
あまりの衝撃に、益々目が冴えて寝れなくなった。
凄く悲しくなって、布団に潜って思いきり泣いた・・・。
明日美奈子から電話がかかって来てのろけ話を聞かされるかもしれない・・・。
今は聞きたく無い・・・ 携帯の電源を切った。

数日はアパートに居て、片付け物とかお掃除とかしようと思ったけれど、もうダメ・・・ そんなエネルギーも出ない・・・。
明日すぐに岩国に帰ろう・・・。
学校が始まれば美奈子と会うことになるし、のろけ話も嫌と言うほど聞かされるだろう・・・。
学校が始まるまでに、綺麗さっぱり信哉の事は忘れて立ち直らないと・・・。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

七瀬の実家は、昔ながらの大きなわらぶき屋根の家で、おばあちゃんと、すぐ近くに分家させた伯父夫婦が住んでいる。
跡をついだのは、七瀬の父だったが、七瀬が大学1年の時に病気で亡くなり、今は祖母1人で住んでいる。
今は、伯父夫婦が農場を嗣いで、祖母は家で食べる分の近くの小さな畑を毎日世話して、暮らしてる。
伯父夫婦には子供がいないので、七瀬の事を我が子の様に可愛がってくれ、一人暮らしの祖母の事も何かと面倒をみてくれて、本当にいい人たちだ・・・。

七瀬は朝8時にアパートを出て、電車と新幹線を乗り継ぎ、岩国の駅からゴトゴトバスに1時間揺られ、やっと懐かしい我が家に帰って来た。
家の前のバス停を降りたらもう午後4時近くだった・・・。

広い庭の片隅にある井戸で、七瀬の祖母が野菜を洗っていた。

「おばあちゃんただいま！　帰って来たちゃ。」
七瀬が後ろから祖母に抱きついた。

「あら七瀬、よく帰って来たねぇ。」

「おばあちゃんにぶちあいたかったよー。」

「何やしらんけど、急に甘えん坊になったっちゃねぇ。」

ーーー田舎に帰って来て数日が過ぎた・・・。
七瀬は、伯父夫婦の農作業を手伝ったり、幼なじみと会ってお喋り

に花が咲いたり、祖母と小さな畑の手入れや収穫をしたり・・・。
祖母と一緒に肩を並べて台所で田舎料理を作ったり・・・。枕を並べて夜お喋りに花が咲いたり・・・。
田舎の豊かな自然に触れて、温かい身内や近所や地元の人と触れ合って、七瀬のしおれかけた心の花も、水を与えてもらったように、ゆっくりと潤って来て、だんだん元気を取り戻しはじめてきた。

そんなある日、久しぶりに携帯の電源を入れて驚いてしまった・・・。
着信履歴を見たら、美奈子から膨大な数の電話やメールの嵐・・・。

『のろけ話を私に自慢したいのかしら？もう・・・なんなのー。』
元気になりかけてきた心の花が、一気にしおれた。
メールを開いたら、「ちょっと不味い事になってトラブル発生中・・・連絡待ってる・・・。」と書かれていた・・・。

『ドキッ！！』
凄く嫌な予感がした・・・。

慌てて美奈子に電話を入れる。
「あ・・・美奈子・・・ごめん。電話の電源ずっと落としてた。何かあったの？」

すっとんきょうな美奈子の声・・・。
「七瀬・・・信哉さんにバレちゃって・・・ちょっと不味いんだ・・・。七瀬の事も話しちゃった」

「えええーっ。私・・・今、田舎に帰ってるんですけど・・・」

「信哉さんから何度も、七瀬を連れて来いって言われてて・・・」

「えええーっ！！　そんなぁ・・・」

「詳しい事は会ってから話すから、お願い・・・悪いんだけど戻って来て！！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ーーー七瀬はやむなく、数日田舎に滞在しただけで、東京にとんぼ返りしてきた。

美奈子とカフェで待ち合わせして、詳しい話しを聞く事になった。

「まず初めにごめんなさい！！　入れ替わったあの日の晩に七瀬に送ったメール・・・実は嘘なの・・・」

「えええーっ！！」

し・・・し・・・信じられない・・・。

あのメールでどれだけ私が傷ついたと思ってるのか・・・。

怒りを通り越して呆れ果ててしまった。全く・・・美奈子ったら・・・。

「それがさ、あの日なんだけど・・・１５秒ぐらい抱きしめられた後、どうなったと思う？」

「全然分からない・・・」

「美奈子じゃない！！君は誰なんだ！！って怒り出して・・・。大変だったんだ」

「ええっ」

「七瀬のことは伏せて、政略結婚が嫌で身代わりを頼んだ事を話して謝ったの・・・。訴えられるかと、もう心臓バクバクで・・・。・・・であの日、すっかり疲れ果ててグッタリしながら家に帰って・・・。

自分の蒔いた種だから仕方無いと言えば仕方無いんだけど・・・ちょっと頭に来ちゃって・・・。つい関与した七瀬に当ってしまったの・・・。本当にごめんなさいね。

次の日謝ろうと思って、電話入れたら、もうずっと繋がらなくて・・・。謝れなかったの」

「で・・・。どうなったの？」

「ごめん・・・。七瀬の事話した・・・」

「ええっ。そんな・・・。どうしよう・・・」

「それからさ、私バツイチになるかなって思ってたけれど、婚姻届は卒業後にって考えていたらしく、出してなかったの・・・。その点はホッとしたよ」

「で・・・」

「あれからずっと、七瀬を連れて来てって言われて・・・」

「ええっ・・・」

それを聞いた途端、心臓が凍りつきそうになった・・・。

きっと物凄く怒ってて、心が傷ついてしまって、凄く悲しんでいるだろうな・・・。

私の事もきっと憎んでると思う・・・嫌われてしまっただろうな・・

・。

どんな顔をして会えばいいのか・・・。

でも・・・やっと心から謝る事が出来る・・・。

ずっと・・・ずっと・・・謝りたかった。

（第８話に続く）

第7話　帰郷　（後書き）

（作者より一言．．．m（＿＿）m）

自然豊かな美しいイメージがあり、主人公の田舎を岩国にしましたが、方言等、実際とは異なると思われます。

なんちゃって岩国方言ですが、お許し下さい。m（＿＿）m（汗）

お詳しい方がおられましたら、訂正（正しい方言）を教えて下さい。

後で修正したいと思います。

第8話　本当にごめんなさい

七瀬は心臓をドキドキ・・・バクバク・・・させながら、恐る恐る、信哉のマンションのエントランス入り口に入って行った。

高級マンションには、２４時間オープンのフロントがあり、コンシエルジュサービスカウンターもあるし、プールや温泉もあるし、ゲスト用の高級ホテルクラスの宿泊施設もある・・・。

七瀬は恐る恐るフロントに行った。
すでに話しが伝わっているようで、すぐに通された。
と言っても、ほんの少し前まではここの住人だった訳で、フロントの人とも顔見知り・・・。とてもバツが悪い・・・。

最上階まで専用エレベーターに乗る。
上に行く程に、心臓の鼓動は激しく大きくなっていった・・・。

震える指で、インターホンを押した。

ドアが空いて、お手伝いの芳枝さんが出てきた。

「あ・・・どうも、お久しぶりです」

「どうぞ・・・。待ってましたよ」
優しい笑顔の芳枝さん・・・。

「ど・・・どうも・・・。おじゃまします」
ついこの間まで住人だったのに、おじゃましますと言って家に上がるのが、ちょっと変な気分・・・。

一歩部屋に入ったら、益々心臓は大きく激しく鼓動し、足までガクガクブルブルしてきた。

信哉さんは、応接間のソファーに座っていた。
凄く怒っている感じに見えた。

「し・・・信哉さん」

「北城七瀬ちゃん？」

「はい」

「君の本名は七瀬ちゃん？」

「本当に・・・本当に、すみませんでした・・・」

「ひどいじゃないか。」

「なんてお詫びしていいか・・・」

「ずっと騙していたんだね」

「はい・・・」

「どんな気持ちでいたの？」

「初めはお金目当てでした・・・。でも、信哉さんがとても良い方だから・・・心が痛んで、もう限界で、美奈子にお金を返して、終りにしてもらいました」

「僕の事、どう思ってたの？」

「初めは、泣く泣く政略結婚させられる美奈子に同情的でした。もしかしたら、心の何処かで、お金の力で政略結婚しようとするあなたを、見下げてるような感情を持っていたかもしれません。でも、会ってみて、とても純粋で優しくて良い方だなって思って、すぐにそんな人ではないって事が分りました。家族を欲しがっているのに、なかなかご縁に恵まれずに、已むに已まれずだったのだと分かりました。一緒に過ごすうちに、どんどん魅かれていって・・・騙している罪悪感で心が痛くなって、心が押しつぶされそうになって、気が変になりそうでした。そして、一緒にいる事が辛くなりました。」

「僕に好意をもってくれてるのかな？」

「は・・・い。信哉さんはとても素敵な方で、魅力的な方です」

「ねえ、もう一度初めからやりなおさないか？」

「え？」

意外な言葉に目が点になる七瀬・・・。

「こんな体だから、なかなか結婚出切るチャンスも無くて、初めは政略結婚でも良いから家族を持ちたいって思って、それで美奈子と結婚を決めたんだ。でも、君と出会って、心から好きになってしまって、とっても幸せな結婚をしたと喜んでいたんだ。君を失いたくないんだ。君が嫌じゃなければ、ずっと側にいて欲しい・・・」

「私・・・信哉さんにとても酷い事をしたのですよ？　そんな資格無いです・・・」

「構わないよ。僕の側にいるのは嫌かい？」

「いいえ・・・信哉さんの側に居られたらと何度も夢見ていました・・・でも・・・」

「じゃあ、側にいて欲しい・・・」

「本当にいいのですか？」

「ああ・・・」

「私を許して下さるのですか？」

「もう怒ってないよ」

嬉しくて涙が出た。

信哉が手を伸ばして、七瀬の頬に触れて泣いて居る事に気がつく・・・。

「泣いているの？」

「嬉し涙です。」

それと同時に力が抜けた。

「七瀬ちゃん！！」

「ごめんなさい。力が抜けちゃいました」

へたり込んだ七瀬に手を伸ばし、信哉がギュッと抱きしめた。

久しぶりに感じる信哉の腕の中のぬくもり・・・幸せで胸がいっぱいになった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

それから、七瀬の祖母に挨拶したいと、信哉の希望で、一緒に七瀬の実家に行く事になった。
２人は、広島行の新幹線に乗っていた。広島からは山陽本線に乗り換え、岩国駅で降りる・・・。

「信哉さん、疲れてないですか？」

「大丈夫！！　七瀬・・・」

「はい？」

「やっぱり七瀬って名前が一番あってるし、いい名前だよ」

「本当？　嬉しいな」
お互い手を握ったり、握り返したり・・・。まるで新婚のようだ。

「田舎の家、すごく古風なんですけど、驚かないでくださいね。ご飯はかまど炊きで、風呂は薪なんですけど・・・」

「ええっ。凄いね！なんか感動だな・・・」

「大丈夫か心配になってきます・・・」

「何とかなるよ」

トンネルをくぐって、風圧で窓が『ドンッ』と音を立てた。
外が暗黒の世界の様に真っ暗になる・・・。
「信哉さんに謝らなければいけない事が・・」
「なに？」
「先輩と一緒に出かけると言って、帰りが遅い日があったと思いますが・・・」
「うん？」
「一緒に出かけた先輩って、実は・・・男の先輩で・・・信哉さんを忘れようと思って、壁を作らなきゃと思って・・・ごめんなさい」
「ええっ！！それは頭に来るなぁ」
「手を繋いだぐらいでそれ以上は何もありませんから、許して・・・」
「僕と言う人が居ながら、浮気してたわけ？」
さっきまでの笑顔は消えて、怒った顔の信哉。
「ですが、あの時は本当の夫婦じゃなかったし・・・。いつか離れなくてはいけない人だから、一生懸命忘れようと思って・・・。だからお願い許して・・・」
「許してはあげるけど、もう二度と他の男とつきあわないでよ」
「はい、約束します。もう本当の恋人同士になったから、もうそん

な事しません。
ずっと気になってて・・・話したら、ずっと心の中にあった重い石がとれた気持ちになりました」
「僕は、その話しを聞いて、心の中にもやがかかったよ・・・」
すっかりご機嫌斜めになった、信哉。
「本当になにもなかったですから・・・」
「でも、デートして、手を繋いで仲良く歩いたんでしょ・・・。ちょっと焼けるな。まさかキスはしてないだろうな・・」
「してませんよ!! ってか、そんな大きな声で・・・。周りに聞こえてしまいますよ・・・」
信哉は黙りこくってしまった・・・。
「信哉さんって怒ると無口になっちゃいますね」
そう言って、七瀬は信哉の肩にそっと頭をもたれて甘えたが、信哉はプイッと背中を向けた・・・。
「信哉さん?怒っちゃったの?」
指で背中をトントン・・・。してみたが、反応がない・・・。
「クイズです。私のファーストキスの相手は・・・」
と言ったら、慌てて信哉がこっちを向いた。
「だれだれ?」
「気になります?」

「うん、気になる」
七瀬は小声で言った・・・。
「それは、あなたです」
「うそ。　あの時？」
「はい。彼氏いない歴２１年でしたから・・・」
「ちょっと感激した」
「じゃもう怒ってない？」
「ああ・・・許してあげる」
「良かった・・・でも、危なかったですよ。
あの初めての晩、もし迫られたら、撲殺しようって思ってましたから・・・」
「うわっ。危なかった・・・」
「ふふふ・・・」
「そうそう・・・。アパート引き払って、また家に戻ってきてよ」
「それなんですが、学校は国分寺のアパートの方が近いし、結婚するまではあそこで暮らそうかなって思ってるんです」
「何で突然?!」

「一緒に暮らすとけじめがなくなってしまいそうで、自信が無くて・・・」

「なんで？　いつも一緒に寝てたけどなにも無かったじゃない」

「あれは、偽の奥さんを演じていたから、割り切ってたけど・・・。お互いの気持ちが分かったら、そう言うわけには・・・」

「卒業して、結婚するまで何もしないって守るから・・・」

「信哉さん、よく大丈夫ですね？美奈子がもしかしたら？って言ってたけど・・・。まさか・・・」

「ばか！！　一生懸命耐えていたのに・・・」

「そうなんですか？」

「正常だよ。約束も守るから・・・」

「う・・・。うん。　でも・・・」

七瀬は心の中で、私の方が許してしまいそうで自信が無いんですとつぶやいた。

「うーん。学校が遠くなっちゃって、困るなぁ・・・」

「アパート引き払ってね」

「うーん」

不思議なものだ、偽妻を演じている時には何でもなく平気だったの

に、本当の恋人になったら、自分の気持ちをコントロール出来るかどうか、急激に自信が無くなった・・・。

（第９話に続く）

第9話　穏やかな岩国の日々

やっと岩国駅について、タクシーに乗った。
「信哉さん、遠くてごめんなさいね。疲れたでしょう・・・・」

「大丈夫！」
七瀬に心配をかけないようにと気丈に振る舞ってる感じだが、ちょっと疲れた様子だった。
荷物は先に送っておいたので、その点は大丈夫だが、目の見えない信哉にとって、この長旅は、勝手も分からずかなりの重労働だと七瀬は思った・・・。気が気でない・・・・。

「気を使わせちゃってかえって悪かったね。旅行気分を味わいたくて電車にしたけど・・・。帰りは1人だし、車を呼んで帰るよ」

「私に気を使わないで下さいネ。私は全然平気ですから・・・なんだったら、帰りだってご一緒しますよ」

「大丈夫だよ。七瀬はゆっくりしていって欲しいな・・・。遠いし、なかなか簡単には帰郷できないんだからね。僕はうちの車を呼べば、あとは部下が手伝ってくれるから、大丈夫だよ。遠いから、交代の運転手にも来て貰う事にするから、安全面も心配ないよ。」
ふっと優しい笑顔の信哉・・・。

「はい・・・」

七瀬の実家に到着したら、縁側にいた祖母が2人に気がついて、嬉しそうな笑顔で慌てて出迎えに門口までやってきた。

「おばあちゃんただいま！　電話で話した、鳳信哉さんじゃ」
ちょっと含羞みながら、祖母に紹介した。

「こんにちは。よく来たねぇ。話しは七瀬から聞いちょります。いつも七瀬がお世話になっちょります」
頭にかぶっていたてぬぐいを慌ててとって、何度もペコペコと信哉に頭を下げた。

「初めまして、御挨拶に伺いました。鳳信哉です。よろしくお願いします」
祖母の声のする方に向いて、少し緊張顔であいさつする信哉。

七瀬はふと、信哉が自分の実家に来ている事も、祖母にあいさつしている事も、夢ではないかと思った・・・。
偽物の花嫁だった自分が、そう遠くはない未来には本当の花嫁になるなんて信じられないような気持ちだ。こんな素敵な人の奥さんになれるなんて・・・。
嬉しすぎて、背中に羽根が生えて、天井高く飛んでいってしまいそうな気分だった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

家に上がって、三人で暫くたあいない事などを笑いあって喋っていたが、ちょっと話しが途切れたころ合いを見計らって、信哉が改めて姿勢を正し真剣な表情で祖母に挨拶した。
「この度は、七瀬さんとの結婚のお許しを頂きたく、お伺いしました。このような体で色々ご心配もあるかと思いますが、七瀬さんに負担をかけたりするような事がないように努力し、また、彼女が幸せな結婚生活を送れます様に人一倍頑張っていきたいと思っております。もしお許し頂けたら、七瀬さんが大学卒業後に結婚をしたい

と思っております。どうかお許しください。」

感無量のような穏やかな表情をして、優しい声で七瀬の祖母が口を開いた。

「七瀬からいつも話しはうががっちょります。ふつつかな孫娘ですが、どうぞ宜しく御願い致します」

「お許しくださり、ありがとうございます。七瀬さんに苦労させないように、幸せにしてあげられるように頑張ります」

「七瀬を見たら大切にしてくれちょる様子が分かります。体の事は気にせんで、大丈夫じゃけん。肩苦しい挨拶はこのへんで・・・。ゆっくりしていってくんさいね」

「ありがとうございます。結婚を許諾して下さり、とても嬉しく思います」

目を輝かせ、頬を染めて嬉しそうな笑顔の信哉を見て、七瀬も嬉しくて微笑んだ。

「おばあちゃん、ありがとうね。おばあちゃんは心のぶち広い人だから、心配しなくて大丈夫じゃけんっておもうちょったよ」

七瀬が祖母の手を取って、優しく擦って言った。

「2人とも幸せにねぇ」

その後、伯父伯母夫婦もやってきて、皆で笑いあいながら七瀬の小さな頃の話や、地元の話しなどの話題で盛り上がり、やがてお膳の上には、祖母と伯母が丹精込めて作った、持成しの田舎料理が沢山並んだ・・・。

信哉は初めての料理も多くて、あれこれ珍しい田舎料理の話しも聞

きながら、お腹いっぱい楽しんだ。
隣に座っている七瀬が一通り、並んでいる料理の数と位置と大まかな説明をした。
「信哉さん、7時に大平って言う野菜の汁物があります。少し熱いから気をつけてくださいね。6時にお寿司、5時に煮物で・・・」
七瀬が時計の針に見立ててひとつひとつ位置を教えて、食器にそっと横から触れさせた。

「このお寿司は？郷土料理ですか？」
お寿司を美味しそうに、ひとくち口に入れて、信哉が聞いた。

「これは殿様寿司っちゅう言います」
伯母がにこやかに、言った。

「殿様寿司？」

「岩国寿司とも言ってね、大きな木枠に何層にもサンドイッチみたいに重ねて作る郷土料理なの。サワラとかアジとか生魚の身をほぐして混ぜてあるのよ」
信哉の隣に座って、七瀬が一生懸命説明する。

「へえ・・・こんな美味しい郷土料理が食べれて幸せだな」

「信哉さん、うちの米は、おじちゃんが作った米なのよ。おじちゃんの自慢の米なの」

「家は昔ながらの家で、ご飯も釜戸でたいちょります。風呂も薪で・・・。なんもないとこじゃども、ゆっくりくつろいでいってくださいね」

信哉は初めて薪の風呂に入った。
補助に伯父が手伝ってくれて、外から七瀬は風呂釜に薪をくべた。
「おじちゃん、湯加減はどうじゃ？」

「七瀬、薪のくべすぎだぁ。熱すぎるっちゃ」

「ごめん。おじちゃん、水でうめてぇ。
信哉さんゴメンね、久し振りだから薪を入れ過ぎちゃったみたい。
のぼせないでね」

やがてお風呂から上がって来た信哉に、七瀬は逆上せてないか気が
気でない・・・。
「信哉さん、熱すぎてない？逆上せてない？」

「ううん、大丈夫だよ。おじさんが気を使ってくれていいお湯加減
だったよ。
　薪のお風呂は体の芯まで温まるね・・・。お湯が柔らかい感じが
したよ。良いお湯だった・・・」

凄く嬉しそうで、長旅の疲れもとれた様子に七瀬もホッと嬉しい気
持ちになる。
「良かった・・・」

夜寝る時は、男同士気兼ねなくご不浄に行く時なども、色々聞いた
り頼めるだろうと言う事で、目と鼻の先にある伯父の家で信哉は寝
た。
また、七瀬の家は田舎トイレだが、伯父夫婦の家は新しく建てた家
なので、設備も新しく過ごしやすいだろうと言う事で、そちらに泊
まってもらう事にした。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

次の日は、祖母が世話をしている近くの畑に2人で出かけた。

「信哉さん、通路が狭いから、私の後ろについて来てね」

「うん」

信哉は七瀬の肘を持って、後ろからついて行った。

「ここにしゃがんで・・・」

七瀬が信哉の手を取って、ピーマンに触れさせ一緒に収穫。

「ピーマンを掴んで、ちょっとねじるようにすると、とれますよ、ほら・・・」

「あ・・・。本当だ」

「面白いでしょ？」

「楽しいね」

都会育ちの信哉には、珍しい事ばかりで目を輝かせて嬉しそうだ。

まるで童心に帰ったような・・・ 少年っぽい顔になる。

「こっちはトマト・・・。かじってみて」

信哉に瑞々しいトマトを渡す。

ひとくち噛ったら、フルーツのような甘さと心地よい酸っぱさが口の中に広がる・・・。

「凄く甘いね」

「美味しいでしょ。ふふふ・・・子供の時、畑の野菜が私のおやつだったの」

「だから七瀬は肌がきれいなんだ」

「え？そうですか？」

「うん。触るとスベスベしてる」

「わぁ。スイカが良く出来てる。信哉さんハサミ持って、ここを切ってね・・・」

七瀬がハサミを持った信哉の手を取って、切る場所まで誘導する。

「どれ？　ここ？」

「うんそう、いいよ」

信哉はハサミで言われた所を切った。思ったよりも固くて一度では切れずに、もう一度力を入れて切る。

顔がちょっと真剣になる。

「信哉さん持ってみて！スイカの収穫完了・・・」

「うわお。大きいなあ」

重くて大玉のスイカに驚く信哉・・・。

「井戸に浮かべてあとで食べましょ」

「楽しみだな」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

畑収穫の後、家の近くを流れる川にやって来て、二人で土手に座って足を水に浸けた。
うだるような岩国の夏の熱さからは想像できない程水がひんやりと冷たい。
一瞬足を入れた時に、キュッと体が引き締まるような冷たさ・・・。

「うわぁ。冷たいな・・・」

「でしょ」

「七瀬は、こんな素晴らしい大自然の中で育ったんだ」

「うん。田舎の野生児・・・」

「僕は生まれも育ちも東京だから、羨ましいよ」

「これからずっと、毎年来ましょう・・・。ここはもう、信哉さんの田舎だから」

「うん。凄く嬉しいよ。この景色見たいな」

「いつか見れる時が来たら、沢山見て下さいね。きっとそんな日が来ます。私そう思います。早くその日が来ます様にいつも祈ってますから・・・」

「うん。七瀬の顔も凄く見たいよ・・・」

「大した顔じゃないけど、見れるようになったら、いっぱい見てね。ずっと私を見続けていてね」

「うん。永遠に・・・ 七瀬の顔触っていい？」

「うん・・・」

七瀬がそっと目を閉じて信哉の方に顔を向けた。

信哉が手を伸ばして、愛おしそうに七瀬の額から眉毛・・・ 目・・・ 頬・・・ 鼻・・・ 口・・・ 手で優しくたどっていった。

「かわいい顔してる・・・」

「今は私が沢山、信哉さんの顔を見続けてるから・・・ あなたの綺麗な瞳に私が映ってますよ・・・」

「七瀬には、僕はどんな風に見えるのかな？」

「初めて見た時、とても綺麗でウットリして見とれちゃいました」

「え・・・」

照れる信哉。

「髪の毛は栗色で少し天然パーマで、緩いウェーブがかかってて、まつ毛が長くて、目も栗色で、くっきり二重で大きくて、色白で・・・。石膏デッサン人形のヘルメスに似てて・・・。くちびるがセクシーで・・・ 引き寄せられて・・・」

そう言って、優しくキスをした。

緩やかな優しい風が、草をそっと揺らし、川のせせらぎが心地よく聞こえていた。

あとは虫の音だけで、他には何も聞こえない・・・。

―――長いキスの後、２人暫く無口になって寄り添っていた。
そして七瀬が口を開いてポツリとつぶやいた。

「あの時なんで身代わり花嫁なんて、馬鹿な事をしでかしてしまったのか・・・。今でも自分が信じられません。確かに学費の工面や画材費に苦労して、大変だったし、何も言わずに苦労して仕送りしてくれてるおばあちゃんの事を思うと何とかならないかっていつも思ってて・・・・。思い出の山を処分するって言う話しを聞いて焦る気持ちもあったし・・・。そんな時に１千万円と言う話しを聞いて・・・」

七瀬は、石ころを拾って川に投げた。
「欲に押しつぶされて負けてしまった自分が情けないし、人を騙すなんて事を平気でしでかして、とても恥ずかしいし・・・。今でも悔いてます」

「確かに良い行いでは無かったけれど、でもさ、あの事がなかったら、こうやって僕達は出会う事もなかったんだし・・・。七瀬は十分反省してるし、お金だって返したんだし、もういいじゃない」

「はい。自分をしっかり持って、もう二度と絶対に過ちを繰り返さない様にします」

「ちょっとね、その出会いは運命だったのかなって感じてる・・・」

「えっ？」

「きっとそうだよ。運命の糸で繋がってたんだ。あんな出会いって

滅多にあるもんじゃないしね」
そう言って、優しく七瀬の肩を抱いた。
頬染めて信哉に寄りかかる七瀬。

「ところで、新婚初夜にパジャマがジャージってちょっとビックリしたけど、ここに来て何となく分かる気もして来た・・・」

その話しを聞いて、七瀬が笑い出した。
「ああ・・・。あれですか？　肌弱いし、本当はいつも綿のパジャマ着てるの。レースのついてるフリフリの可愛いの・・・。だけど襲われたら凄く恐いって思って、色気のないクタクタのジャージなら襲われないかなって、わざとジャージをを着てたの・・・」

それを聞いて凄く拍子抜けする信哉。
「えええーっ。なーんだ。そうだったの？　ちょっとショック・・・いつも隣に猛獣が横たわっているように思ってたんだ」

「うん」

「ガーン！！ショックだなぁ・・僕の事恐がってたの？」

「なーんてね。でも、いつも優しくて紳士で、すぐに恐れは無くなりましたよ。
その後は多分爆睡してたかな？　それに、信哉さんのパジャマ姿、すごく素敵で・・・。いつも早く目覚めちゃう時には寝顔も楽しんで見てました」

「僕は白状すると、君が爆睡している時に、ちょっとお触りしちゃった・・・」

「えーっ。やだ・・・痴漢だ・・・。まさか襲ってないですよね？」
「嘘だよ。大丈夫・・・」
ちょっと不味い事を口走ってしまったと慌ててて訂正する信哉。
「怪しい・・・・」
「大丈夫だって！　信じてよ」
「益々怪しい・・・・」
一瞬沈黙した後、一緒に笑いだした。
「いつもハグされて優しくキスされるのが嬉しかったし、夜ベッドで枕を並べて眠くなるまであれこれお喋りするのもいつも楽しかったですよ」
「僕は18歳で目が見えなくなって、両親はその後すぐ事故で亡くなったしずっと孤独だったから、君が側にいてくれて君の体温を感じて・・・。心がどれだけ温められた事か・・・。闇の中から光に手を差し伸べて救ってもらった気がするんだ。ありがとうって言いたいな」
「私も、ありがとう・・・。信哉さんからいつも沢山幸せを貰ってるから・・・」
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
家に帰ったら、祖母が庭先で薪を割っていた。
「おばあちゃん、私がやっちゃげるから、座って休んじょって」

「ああ、七瀬、もどって来ちょったか」

「信哉さん、薪割するから、ここで座って待ってて・・・」

信哉は縁台に腰かけると、七瀬の祖母が麦茶を持って隣に座った。

「良かったら、どうぞ・・・」

祖母が信哉の手にそっと麦茶を持たせた。

「ありがとうございます」

「七瀬の母は、七瀬が生まれてすぐに亡くなっての、私はばあちゃんじゃけんど、母親みたいなもんなんじゃ。赤ん坊の時からこの手で、育ててきた」

「そうだったんですか・・・」

「子供の頃から絵が大好きでの。大好きな絵を思い切り勉強させてやりたいって思って、東京の美大に行かせたんじゃけど、こんな田舎の農家で父親も病気で早く亡くして、苦労しちょるんじゃないかって心配での・・・。年寄でなかなか東京には行けんし、七瀬が困った時には力になっちゃって下さいね。宜しく頼みます」

「はい、安心してください。僕が力になりますから」

「良い人とめぐり合えて、七瀬は幸せもんじゃ。私も安心出来るよ。ありがとね」

祖母は信哉の手を優しくとった。

「僕の方こそ、ありがとうございます。これからもよろしくお願い

します」
七瀬の祖母の手は小さくて、ゴツゴツしてて、働き者の温かな手だった。

信哉は七瀬の田舎で１週間過ごし、東京に帰って行った。
親切で優しい七瀬の祖母や伯父伯母・・・。
穏やかな時間がゆっくりと流れていったような、夢のような心安らぐ幸せな時間だった。

（第１０話に続く）

第9話　穏やかな岩国の日々（後書き）

七瀬の田舎での温かな様子を想像して書きました。
岩国弁はなんちゃって岩国弁ですみません。方言難しいです。（^―^；）

第１０話　君の顔が見たいから

東京に戻って来てから結婚までの事など2人で色々話しあった結果、七瀬は結局卒業まで大学すぐ近くの、今まで住んでいた国分寺のアパートで生活する事にした。
大学卒業まであと1年半少し・・・。前よりも作品製作も忙しくなって来ていた。
信哉と一緒に居たいけれど、一緒に住めば頭の中は信哉の事でいっぱいになって浮かれて気持ちが緩んでしまい、絵の勉強の方が座成りになってしまう。
また大きなキャンバスや画材を抱えての通学も時にはあるが、混雑した電車に乗るのは非常に大変で、時には寝る間も惜しんで作品作りに没頭して深夜近くになってしまい電車が無くなってしまう事態もあるし、また卒業までに認められるような作品を描きたい・・・。欲もあった。出来たら入賞出来るような作品を完成させたい意
結婚すれば、財力のある信哉の妻・・・仕事を持たなくても生活の心配は無いが、自分自身の夢を諦める事は出来ないし、一生懸命学費を捻出してくれた祖母の為にも、将来の職業として絵の道に進みたかった。
苦渋の決断で、卒業まで別々に生活する事を決めた。

―――七瀬は大きなキャンバスに信哉を描いていた。
優しい表情で遠くを見つめる信哉、背景は自然豊かな岩国の田園風景。
純粋で大らかで温かで愛しい人・・・真心込めて誠心誠意自分の持っている最大限の力を発揮できるように魂を込めるように描いた。
もう1枚は岩国の祖母だ。
住み慣れた田舎の縁側に座り微笑む祖母。年輪を重ねた趣のある顔

は、とても優しく慈愛の籠った微笑みを浮かべている。

七瀬が今1番大切で、一番描きたい人達だ・・・。

大学に居残って夢中になって描いていた時後ろから声がした。

「いいね。すごく心に温かみの広がる絵だな」

「あ・・・ 剛志先輩、ありがとうございます。先輩の絵も見せてくださいよ」

「いいよ。是非・・・ 感想聞かせてよ」

剛志先輩とはあれから良いお友達となり、また、お互いに刺激し合って、成長するような同士のようないい仲間となっていった。

剛志の絵は、雄々しく大らかで迫力ある抽象画だった。

色合いが何とも言えない美しい色合いだった。

「素晴らしいです・・・。この色合いと、躍動感溢れる迫力・・・。やっぱり剛志先輩はすごいなぁ。」

「本当？ 嬉しい反応だな」

「これならまた大賞とれますよ」

「今年は協力ライバルが居るからなあ・・・。どうだろう・・・」

「こんな素晴らしい絵の前には、どんな絵も怯んでしまって、とてもかないませんよ」

「いやあ、七瀬ちゃんの絵には負けるな・・・」

「一度ぐらい賞を貰いたいけど、やっぱり剛志先輩にはかないません」

「頑張ってよ！」

「はい。先輩を超えることが出来る様に頑張りますよー」
ガッツポーズをしておどけて見せる。

お互い笑い合った。

七瀬は出来るなら、信哉をモデルに描いたこの絵で賞がとれたらと思っていた。
もしとれたら、この絵を信哉にプレゼントして喜ばせたい・・・。
自分の上に神が降りてきたと言うのだろうか・・・ いつもとは違った何か見えない力を肌で感じたような、自分の中にある、なにかを見つけたと言うのだろうか・・・ いつもとは違う自分・・・ それを感じながら夢中で描いた。

ーーーそんな時、信哉から電話がかかって来た。
急遽、角膜移植のドナーが見つかって、明日入院、明後日には手術するとの事だった。
いつかはこんな日が・・・ と思っていたけれど、あまりにも急な事で動揺は隠せない。
嬉しい反面、もしもと思ったら凄く不安で恐い・・・。そんな事考えたくないけれど・・・。
信哉の感じる光を失うなんて事にはならないだろうか・・・。

慌てて病院に向った。

信哉は入院病棟の個室に居た。もうパジャマに着替えて、ベッドに横になっていた。
その姿を見たら、なんだか痛々しくも見えて来て涙が溢れてきた・・・。
信哉に気付かれ無いように慌てて手でゴシゴシと涙をぬぐって病室に入っていった。

「信哉さん・・・」
突然の事で、気持ちが乱れて落ち着かない・・・。
信哉さんに気付かれ無いように、一生懸命平静を装った。

「突然で驚かせちゃったね」

「ドナーが見つかって良かったです・・・。手術が絶対に成功しますようにってずっと祈ってますからね」

「早く君の顔が見たいよ」

「うん。見て欲しい・・・。でも、ガッカリしないでね・・・そんな美人じゃないから・・・」

「ガッカリするもんか・・・」

「見えるようになって、外出出来る様になったら、色々な場所に出かけましょうね。いっぱいデートしましょう。楽しみだな・・・」

「約束覚えてる？」

「野島崎？覚えてますよ。　行きましょうね」

「七瀬・・・」

「ん？」

「心配しなくても大丈夫だよ・・・絶対に大丈夫だから・・・」

一生懸命気丈に振る舞っていても、信哉に動揺している様子を見透かされてしまったようで、逆に励まされてしまった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

術後、信哉は拒絶反応を起こし、高熱を出した。

とても苦しそうで、見てるのが辛かった。

「信哉さん・・・」

ずっと手を握って、側についていた。

心配した熱は、徐々に下がり、術後の経過も良好で、七瀬はほっとした。

角膜移植は入院中に良く見えるのは稀で、視力が上がるのに早くても1か月を要するそうで、遅い人は半年かかる場合もあるそうで、焦らないで気長に養生する事が必要だ。

傷口がつくのも、3か月から半年ぐらいかかる・・・。

信哉の場合は、早い方で一ヵ月辺りから視力が上がり、その後はメキメキと良くなっていった。

初めて七瀬の顔がぼんやりと見えた時の信哉の喜びは、大変なものだった。

「七瀬の顔が見える・・・。想像した通り・・・とってもかわいい

顔だな」
まだ視力が完全ではないので、お互いに顔を近づけて、喜び合った。
「私・・・目が見えるようになって、すごく嬉しい・・・」
初めて信哉が見た七瀬の顔は、大泣きしているぐしゃぐしゃの泣き顔だった・・・。
「泣き顔じゃなくて、笑顔を見せてよ・・・」
「うん」
一生懸命笑おうとしても、後から後から涙が溢れて止まらない・・・。
「七瀬は泣き虫だな・・・」
「うん・・・」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

手術から半年・・・。
病院に付き添ったり、パタパタと落ち着かなくて、結局絵の方は入賞を逃してしまった。
けれど、七瀬は嬉しかった。
賞を貰うよりも何よりも、また信哉が見えるようになった、その事の方が嬉しい・・・。
絵のチャンスは来年もある・・・。
季節は春となり、七瀬は大学４年生になった。
剛志先輩は、大学院に進み、大学でまたお互いに絵の批評をしあったり、いい友人関係が続いていた。

「七瀬ちゃん。今年こそは絶対に賞を取りなよ」

「はい。頑張ります」

「大学院には進むの？」

「家族に相談しないと・・・でも無理かな・・・」

「家族じゃなくて、婚約者に相談でしょ？」

剛志先輩や、周りの友人は信哉の事を知っていた。

教授にも知られていて、時々からかわれたり、冷やかされたりしてた。

「そうなんですよね。あまり待たせるのも悪いと思うし・・・やっぱり無理かな・・・」

「僕としては、良いライバルが居た方が嬉しいし、大学院に進んで欲しいけどね・・・」

内心もっと勉強を続けていきたい気持ちはあったが、結婚して早く純哉と暮らしたい気持ちも・・・。

ずっと待たせてしまって、これ以上勉強を続けたいからもう少し結婚をまって欲しいだなんてとても信哉には言えない・・・。

「きっと話したら理解してくれるよ・・・」

「でも・・・やっぱり無理だと・・・」

「残念だな・・・。同士であり、いいライバルが卒業してしまうと

闘争心が失せてしまうな・・・」

「ええっ？」

自分など先輩の足元にも及ばないのに・・・先輩の言葉に、七瀬がついクスリと笑った。

「剛志先輩にはかないませんもの。ライバルだなんて・・・。先輩買い被り過ぎですよ！！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

週末、七瀬は、信哉の六本木のマンションに泊まりで来ていた。夕食をとりながら、あれこれと学校の話をしていた。

「でね・・・私がもうすぐ卒業しちゃうから、ライバルがいなくなるって剛志先輩が凄く落ち込んでて・・・。初めから先輩の足元にも及ばないのに・・・可笑しくてつい笑っちゃった・・・」

その話をしたら、信哉が急に真顔になったので、先輩の話はタブーだったかなと気になった。

「ねえ・・・」

「ん？」

ちょっとドキッとする七瀬・・・。

「本当は大学院に行きたいんじゃないのかい？」

「えっ？」

「だって、昔、大学院に進みたいって話していたじゃないか・・・」

「もうこれ以上、信哉さんを待たせたくないし、大学院はいいかなって・・・」

「行きなよ」

「ええっ？」

「あと数年ぐらい、待ってるから・・・。学費の方は僕が出すから・・・。僕に遠慮して諦めちゃうなんて勿体ないよ！！」

「ええっ・・・だって・・・」

「大学院卒業したら、恩返ししてもらおうと思うし・・・」

「ど・・・どんな？」

「障害者と健常者が供に楽しめる美術館を作って貰う・・・」

にっこりと微笑んで信哉が言った。

「そ・・・それって、私の夢でしょ？」

「いや・・・僕の夢にもなったから・・・」

「信哉さん・・・嬉しい・・・」

嬉しくて涙が溢れてきた・・・。

「なんだ・・・また泣いちゃって・・・。七瀬は本当に泣き虫こむしだね・・・」

「だって・・・だって・・・信哉さんいい人過ぎるんだもの・・・」

「究極の褒め言葉だな」

「信哉さん」

「ん？」

「ありがとう・・・。やっぱり信哉さんは素敵・・・」

「もっと惚れ直してくれたかな？」

「うん・・・大好き！！」

こんなに幸せすぎてどうしよう・・・と思うぐらい、七瀬の心は幸せで満ち溢れていた。

（第１１話に続く）

第１１話　七瀬が浮気？

１０月になって、信哉の目はすっかり回復し、車も自分で運転して出かけるようになった。
見えなかった頃と比べると、生活が１８０度変化した感じがする。
嬉しい事ばかりではなかった・・・。

ここ数日、七瀬の携帯が繋がらない。
お互いに忙しい時は数日、メールや連絡のやりとりがない時もあるけれど・・・それにしても今回はその間隔が、いつもよりも開きすぎている気がする。
それに携帯が全く繋がらないなんて、今までなかった・・・。
何かあったのではないだろうかと物凄く不安になって、信哉は仕事を早めに切り上げて、夕方、様子を見に七瀬のアパートまで車でやって来た。

丁度アパートの近くにさしかかった所・・・。
七瀬の部屋の玄関扉がカチャリと開いて、剛志が出てきた。

「えっ？」

そして続けて七瀬が出てきた。
パジャマにカーディガンを羽織ってるのが見えた。

「どういうことなんだ？」

七瀬は笑顔で剛志にペコリとあいさつして、剛志が手を上げて何やら声をかけて、もう一度ペコリとして家に入っていった。

その姿が親しそうなとてもいい雰囲気で、信哉は不快感を感じ、酷く気分が悪くなった。
それに普通、親しくもない男にパジャマ姿を見せるなんて事はありえない・・・。
それに今、彼は・・・ 七瀬の部屋から出てきたよな・・・。

慌てて七瀬の携帯に電話を入れたが、電源が入って無いのメッセージが・・・。

信哉は七瀬に、今見た事を問い詰める事が恐かった・・・。問い詰めて、もし自分の頭に過っている悪い不安が的中したら・・・。彼女を失う事になったら・・・。
七瀬が・・・そんな事ありえない・・・ でも・・・ 今見た事はどう説明がつく？
物凄く恐ろしいものを見てしまった気持ちになって、信哉は七瀬に会わずに引き返した。

ーーーーーそれから数日しても、七瀬の携帯は繋がらなかった。

携帯が繋がらなくなってから、１０日ぐらい過ぎた頃、やっと七瀬から電話がきた。
いつもと変わらない明るい口調だ。

「信哉さん、最近御無沙汰しちゃってごめんなさいね。色々忙しかったの・・・」

「気にしなくて良いよ」
何事も無かったように振る舞う。

「今度会える？」

「今日でも良いよ」

「本当？」

パッと声のトーンが上がって、嬉しそうだ・・・。

「そっちに行こうか？」

「良いの？　嬉しい・・・」

そして、久し振りに七瀬に会った。

七瀬は部屋が散らかっていて、見せるのが恥ずかしいと言うので、アパートの近くの喫茶店で待ち合わせをした。

何事も無かったような表情で、屈託の無い笑顔の七瀬・・・。

七瀬と剛志の　あの光景が浮かんできて、どうにもこうにも心の中がモヤモヤしてきて、いつもの様に笑いかける事が出来ない・・・。

「信哉さん、元気無いみたい・・・。疲れてるの？」

「いや、大丈夫だよ・・・」

「そう言えば携帯がずっと繋がらなかったけど、どうしたの？」

「ああ、あれ？　落として壊しちゃったの・・・」

「そうだったんだ・・・」

心の何処かで七瀬の言った言葉を疑うような気持ちが現れて、そんな自分が嫌な人間に思えたり、でも・・・と、心の中がぐらぐらと揺れ動いていた。

「学校の方はどうなの？」
そんな気持ちを払拭するように、慌てて話題を変える。
「課題制作に忙しいけど、毎日充実していて楽しいよ」
「良かったね」
七瀬の『楽しい』の言葉に、ピクリと強く反応してしまう・・・。
「今日はゆっくり出来るの？」
甘えるような声の七瀬・・・。
いつもならその声に心を時めかせるのだが、今日はなんだか鼻につく・・・。
「そうしたいけど、仕事がたまっててね。もう少ししたら戻らないと・・・」
本当はゆっくり出来たけど、どんどんと頭に血が上って、気持ちを落ち着けて七瀬と向き合えなかった。
「そうなんだ。久し振りなのに淋しいな・・・」
酷くガッカリしたような七瀬の姿に心が痛んだ。
「あ・・・。もうそろそろ行かないと・・・」
いたたまれなくなって、信哉は逃げるように会計伝票を持って席を立った。
「え・・・。もう？」
あまりにも短時間会っただけで、広く驚いた様子の七瀬。
「ごめん、またね」
そう行って足早に、立ち去った。

我ながらいい年をして、大人げない・・・。
目が見えるようになって、反対に心の窓が曇ってしまったような気持ちになって酷く落ち込んだ・・・。

七瀬はまるっきり訳も分からず・・・。
「変な信哉さん・・・」
ぽつりと呟いた・・・。

七瀬と別れてから、信哉は何となく七瀬の通ってる美大の様子が見たくなって、車を飛ばして校門前に車を止めた。
そんな時、かなり久しぶりに美奈子に会った。
あの時は目が見えなかったので、正確に言うと信哉は顔を知らないので、美奈子から声をかけてきたと言った方が正しいが・・・。
「あれ？　信哉さんですか？」

「え・・・。だれかな？」

「あの時はすみませんでした。美奈子です」

「君が美奈子ちゃん？」
確かに七瀬にどことなく似てるなと思った。
だが七瀬の方が全然綺麗で魅力的だな・・・。

「こんな所までどうしたのですか？七瀬は帰りましたよ」

「あれ？　そうなんだ・・・」
わざと惚けてみた。

「そう言えば、七瀬大変でしたね・・・　心配したでしょう？」

「え？」

「あれ？　七瀬から何も聞いてないのですか？」
ちょっと面白い事があるぞと言うような感じに、美奈子が目をクリクリさせた。

「え？」

「七瀬ったら、あの事話してないんだ」
思わせぶりに、もったいぶる美奈子。

「気になるな、詳しく教えて・・・」

「実は・・・」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

信哉は美奈子から話を聞いて、異変驚いた。

ーーーーーーそれは先週の金曜日の事だった。

七瀬は絵に没頭しすぎて風邪を拗らせて、三日間学校を休んでいた。
数日寝てれば良くなるだろうと高を括って甘く考えていた。

ちょっと無理しすぎて体力が落ちていたのだろうか、あまり食事もとれず、意識も朦朧としてきて、だんだん指も震えて来た。
七瀬自信もさすがにこれは不味いと思って慌てて助けを呼ぼうと思った。
「だめだ、ＳＯＳしよう・・・。」
そう思って、信哉に何度か電話を入れたが、会議中か他社のＣＥＯ

と接待中なのか、全く繋がらなかった。
「美奈子に電話しよう・・・。」
やっとの事で、美奈子に電話をかける。

「七瀬〜？　ずっと学校休んでるけど大丈夫？　」

「あの・・・。美奈子？私・・・」

こっちの話を聞かずに喋り続ける美奈子。
「今ねぇ。皆と盛り上がってるところ。七瀬は具合悪そうだからさそわなかった。ごめーん。今度誘うから。ネーッ」
かなり酔っている感じだった。

「優理香や瑞穂や亜由美も居るの？」

「うん。皆で盛り上がってるよ〜」

「分かった」

「今度一緒に飲もうね〜。バイバーイ」
電話口から聞こえる美奈子のキンキン声に更に具合が悪くなった。
友人皆も一緒で、頼めない・・・。
どうしよう・・・。救急車呼ぶ？
益々具合は悪くなり、本当に身の危険を感じ、『１１９』番しようと思った所、携帯の電話が鳴った。

ーーーーー剛志先輩だ・・・。
実は大学の制作展に七瀬も出品して貰いたいと思って電話をかけてきた所だった。
「あ・・・七瀬ちゃん？　羽生だけど」

いつもと変わらない先輩の声が、救いの手を差し延べる、神様の様に思えて来た。

「つ・・・つよし・・・せん・・・ぱ・・・い」

蚊の鳴くような声で、すぐに何かあったなと気付き、吹っ飛んで来てくれた。

剛志はすぐに七瀬をおぶって、近所の救急外来に連れて行ってくれた。

先輩も慌てて走ったし、七瀬も指まで震えるぐらいで、手の力が緩んで持っていた携帯を落して、その携帯は地面にバウンドして運悪く排水口に落ち水没した。

病院の先生に診てもらったら、即入院。

肺炎を併発しかけていて、もう少し病院に行くのが送れていたら、命の危険もあったそうだ。

危うく『美大生、誰にも発見されず、アパートで孤独死』のタイトルで新聞に載る所だった・・・。

5日間入院して、あの日は退院した後の事だった。

お見舞いを持ってきてくれて、玄関先で少し立ち話をして、剛志が帰って行く所を目撃したのだった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

話は戻って・・・。

美大校門前で話す、信哉と美奈子・・・。

「で、この間の水曜日に退院したの？」

「そうなんですよ。もう少し病院に行くのが遅かったら、命の危険

もあったそうですよ」
このスクープ話に信哉がどう反応するか？ちょっとワクワクしながら話す美奈子。

「美奈子ちゃん、ゴメン！　用事思い出したからまたね」
美奈子の話しを聞いて、信哉は血相を変えて慌てて車に乗って去っていった。

その後ろ姿を目で追う美奈子・・・。
「信哉さんってああやって見るととても素敵だな・・・」
背も高くてイケメンで、実業家で、高級外車を乗り回して・・・。
あの時七瀬と入れ替わらなかったら、今は自分の夫だった人だ・・・。
とても複雑な気持ち・・・。七瀬に対して嫉妬の気持ちが沸き上ってきた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

七瀬はまだ本調子ではなく、信哉と別れた後、自宅のベッドで横になっていた。
「まだ体調が今ひとつだわ・・・。信哉さんと会えると思ってちょっと張り切りすぎちゃったかしら・・・。
これから寝まくって、明日は元気に学校に行けるようにしないと・・・」

そんな時、ドアをノックする音がした。
なんとなく怠いから、居留守を使おうと思った時に、声がした。

「七瀬？　居るの？」
信哉さん??

慌てて飛び起きて、玄関扉を開けた。

「あれ？　信哉さん帰ったんじゃないの？」

突然抱きしめられた。

「一体どうしたの？」

「今、寝てたでしょう？　随分細くなっちゃったじゃないか。何で言ってくれなかったの？　もう少しで命を落とす所だったって聞いて驚いたよ」

「誰かから聞いたの？オーバーなんだから．．．。ちょっと風邪を悪化させちゃっただけだから大丈夫！！」

「入院したって聞いたよ」

「う．．．うん。ちょっとね．．．」

「隠し事は無しだよ！！」

「話さなくてごめんなさいね。実は作品作りに没頭しすぎちゃって、少し無理したら、風邪を悪化させちゃって．．．。目は回るし、手は震えて来るしで、信哉さんに電話したら丁度繋がらなくて、美奈子達も飲み会で酔っぱらってるし．．．。剛志先輩が偶然電話をかけてきてくれて、病院に連れて行って貰ったの。そしたら即入院になっちゃって．．．」

「もう七瀬を一人にさせておけない。一緒に住もうよ」

「え．．．？」

「実はさっきね、大学すぐ近くのマンションを1つ買ってきた」
「ええっ！！か・・・買った？」
唖然とする七瀬・・・。
「七瀬が卒業するまでの借宿だけどね」
「えええええーっ。その為だけに？」
「大した事じゃないよ」
「私には驚く事なんですけど・・・」
冷や汗が出てくる・・・。
「取り合えず今日はここに泊まるから・・・」
「でも寝具とか、この家にはありませんよ？」
「気にしない、気にしない」
ーーーーそして・・・・。
「ねえ、信哉さん・・・。こんな小さなシングルベッドに一緒に寝て、苦しくない？　信哉さん背が高いし、体も大きいし・・・大丈夫？」
「ううん。全然・・・懐かしいなぁ。　いつも一緒に並んで寝たね」
「確かに・・・。始めは襲われないかってとても恐かったけれど、

そんな人じゃないって分かってからは、楽しかったわぁ」

「この布団、七瀬の匂いがする」

「え？臭い？」

冷や汗の七瀬・・・。

「ううん。良い匂いがする。部屋中七瀬の匂いで満ちあふれてるね」

「信哉さんもね、いつも良い香りがするんだけど香水？」

「愛用のをちょっとつけてるけど・・・。」

「とっても良い香りがする。その香り好きだな。この香りがすると、信哉さんの香りだーって思うの」

「ふふふっ。そうかい？　七瀬、今日はジャージじゃないね」

「もうっ！あの時の事思い出すと冷や汗がてて来るわ・・・」

「今日はとっても可愛いの着てるね」

「襲われないように、ジャージに着替えようかな？」

「ダメ」

「襲わないでね」

「うん。なるべく」

「絶対だからね」

「出来るだけ・・・」

「ダメ。確実にね・・・」

「うん。それなりに・・・」

その後の展開はあなたのご想像にお任せします・・・。

（第１２話に続く）

第１２話　羨望と嫉妬

あれから信哉が学校のすぐ近くに購入した、広い大きなマンションで一緒に住む事になった。
通学は、歩いて行ける距離なのに、運転手付のベンツのリムジンで送迎付・・・。

ーーーーー目立つ・・・凄く目立ちすぎる・・・。
恥ずかしすぎてやめて欲しかったけれど、あの入院騒ぎの件以来、信哉から凄く大切に過保護にされて、この様な状況になってしまった。
病院に行くのがもう少し遅かったら、命に関わる危険もあったということがよっぽど堪えたらしい・・・。
彼の気持ちが痛い程分かる・・・もし反対の立場だったら・・・ゾッとする・・・。
愛するものを失うかもしれない恐怖・・・。
だから、信哉の好意を無に出来ないような・・・でも・・・目立つ・・・。
何となく、背中に回りの羨望の視線がグサグサと突き刺さっている感じがして落ち着かない・・・。

「七瀬おはよう！」
エントランス前で、背中をポンと叩かれて、ふり返ったら美奈子だった。

「あ・・美奈子・・・。おはよう」

「今日もリムジンの送迎で登校？　目立つねぇー」
走り去って行く車の方に目をやり、面白そうな興味津々の顔で冷や

かす。

「ああ・・・言わないで・・・はずかしいわ・・・」
七瀬は顔をふるふるとふって、頬をピンクに染めた。

「で・・・。信哉さんとのスィートな同棲生活はどうかな？」
コンコンと七瀬を小突きながら、傍耳を立てるように顔を近づけて探りを入れてくる。

「え？　今までと変わらないけど・・・」

「うそでしょー。まさかまだ清い交際続けてるの？」
今の答えはとても意外だったらしく、口に手を当てて声のトーンが上がって、回りが何事かとチラとこっちを見た。

「うん。結婚するまではそのつもりだけど・・・」
七瀬は恥ずかしくなって、何となく身をすくめて小さくなって、小声で返答した。

「ハグして、キスして、お手々繋いで仲良く寝てるの？」
声のボリュームがアップした感じで、回りの視線が気になる・・・。

「え・・・まぁ・・・」

「あんた達、変！！」
目が点状態にあからさまに驚愕の表情をする美奈子・・・。

「え？そうかな？」
変！！と言われて、ちょっとショック・・・。

「私には理解出来ないわ！！」

「そ・・・そうかなぁ・・・」

はっきりとそんな事を言われると、急に不安な気分になってくる。

ーーーーなんか変なのかなぁ？

本当言うと、ちょっと気にかけていた・・・。

私の事を思いやって、決して無理意地しないで大切にしてくれてるんだと思うけど・・・。

信哉さんの心の中の本心は・・・。どうなんだろう・・・。

実は私にあまり魅力を感じてないとか・・・。

何処か病気だったりしてとか・・・。そんな無粋な考えまで時々浮かんでくる・・・。

勿論、恋愛経験ないし、男の人とお付き合いとか恋人同士のプライベートな事とか、そういった分野は未知の事なので謎だし・・・。

いくらフィアンセとは言っても、心の準備もない状況で突然狼に変身されたら、いくら大好きな人でもちょっと恐い・・・。

そう思う反面、時々人には言えない気持ちが現れる・・・。

最近、そんな気持ちがグルグル頭の中を駆け巡って、どうにもならない・・・。

学校の作品制作でも大変な状況なのに、一緒に住み始めてあれこれとつまらない事で悩んで・・・。

更に、毎日リムジンの送迎・・・。やっぱりちょっとお疲れモード？

ーーーーそんな時だった・・・。

同じクラスメートの　亜由美が、血相を変えて飛んできた。

「七瀬、大変だよ！」

「亜由美、どうしたの？」

「七瀬の絵が・・・・・」

「え？」

慌てて亜由美と一緒に教室に行った、今作成中の絵がざっくりと切られていた・・・。

あまりのショックで言葉が出ない・・・・。

学校の職員や先生方が飛んできて、大騒ぎになった。

剛志先輩も話しを聞きつけてやって来た。

「なんて酷い事をするんだ！！」

回りの学生達も衝撃を受けていた・・・。

「課題提出日まであと3日なのに・・・」

「誰が何の為にやったんだろう？」

「恐いよね・・・」

クラスメート達もショックで顔が青ざめている。

七瀬の絵しか切られてないと言う事は、七瀬を狙ってやったとしか考えられない・・・。

隣のクラスの美奈子もすっ飛んできた。

「七瀬！！　今話しを聞いて、驚いて・・・・」

「美奈子・・・・」

警察に届ける話しも出たが、学生のイタズラかもしれないし・・・・。

私も大騒ぎにされたくなかったので、じばらく学校側職員の方で、内部調査するとの事で、お任せする事にした。

「私、そんなに嫌われてるのかな？」

「そんな事ないよ・・・」

「そうだよ、私達皆、七瀬の事、好きだし・・・」

「きっと、ただのイタズラで、たまたま七瀬の絵が狙われたんだよ」

美奈子や亜由美達が一生懸命慰めてくれたが、心は晴れない・・・。

皆には言わなかったが、切り裂かれた絵ともうひとつ自宅で描いているものと2点同時進行で進めていた。

どちらにしようか迷っていたのだが、結局自宅にあった作品の方を提出しようと決めていた所だったので、その点はホッとしたが・・・。

自分の事を狙っての犯行だと思ったら、とても恐ろしいし凄く悲しく思った・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

何事も無かったように装って家に帰ったが、すぐに信哉に見破られた。

「元気ないね。何かあったでしょう？」

いつもの優しい眼差しで、心配そうに顔を覗き込んできた。

「え・・・。そんな事ないですよ」
苦笑いしながら一生懸命否定・・・。

「嘘ついてるね・・・。七瀬の事はすぐ分るよ。話してごらん」
七瀬の手をそっと引き寄せられて、信哉に導かれて一緒にソファーに並んで座り、ふんわりと七瀬を包み込むように抱き寄せて来た。

「恐いなぁ。　どうして分かるのかな・・・」

「以心伝心・・・。七瀬の事はすぐ分るよ。いつもと様子がちょっと違うから・・・」

信哉のやさしい手で愛おしそうに頭を撫でられると、気持ちがすごく落ち着く。

「信哉さんに隠し事は出来ないのね。　実はね・・・学校に置いておいた私の絵がイタズラされて・・・」

事情を話したら・・・。
信哉が驚いて、優しく撫でていた手がピクリと止まった。
「絵を切るだなんて、狂気を感じるよ。七瀬に何かあったら大変だし、警察に届けたほうが良い様に思うな」
今にも警察に通報しそうな勢いで、七瀬が慌てて制止するように話しを続けた。

「あまり心配しないで！先生方も調査してくださってるし・・・。実はあの絵は、提出しない事に決めてるから。大切な方の絵は家に置いてあるし・・・」

「大学に行かせるのも心配になってくるよ・・・」

「やだ・・・大袈裟すぎますよ！　誰を狙ったと言うわけではなくて、無差別的なだたのイタズラかもしれないし・・・。
そんな過保護にしないで！！　ほら、私は田舎の山猿だから・・・。
こんな事ぐらい平気　平気・・・」
元気ポーズを見せる。

「もう・・・。七瀬はいじらしいな・・・」
そう言って、七瀬をキュッと抱きしめた。

「私には信哉さんがいるから、大丈夫！！」
信哉の胸に甘えるように頬をすり寄せた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌日七瀬は少し早めに学校に行き、練習用に描いた要らない絵を持って来て、わざとイーゼルに立てかけた。
本当に自分を狙っているのなら、またイタズラされるかも知れない・・・。

剛志先輩が、学校に許可をとってビデオを持って来て、皆がいない時にこっそり仕掛けてくれた。
「あまり長時間は撮れないけど、もしかしたら犯行現場を押さえる事が出来るかもしれないからね」

「きっと外部の者のイタズラだって思いますが・・・　もし映っていたらなんか恐いですね・・・」

そして、数日後・・・。
また事件が起きた・・・。

今度は絵に3ヶ所、刺したような穴が空けられた。

果たしてビデオには・・・・。

剛志先輩が、青ざめた顔をした。

「学校の方にはもうすでに届けておいたんだが・・・・。七瀬ちゃん、気持ちを落ち着けて話しを聞いてね・・・・」

ビデオを見せてもらって、とってもショックを受けた・・・。

恐ろしい形相をして、七瀬の絵にプスプス穴を空ける、美奈子の姿・・・。

七瀬が事を穏便にして貰えるように学校にかけあって、口頭注意のみとなった。

それから程なくして、美奈子は大学を自主退学していった。

どうしても、美奈子と話したくて、友達を介して美奈子をカフェに呼び出した。

「美奈子・・・どうして、あんな事を・・・」

「七瀬が憎らしくてたまらなかったの」

「え・・・」

「本当は私の夫になるはずだった信哉さんとイチャイチャして・・・学校にリムジンで乗りつけて・・・生意気で・・・」

「だって、結婚を嫌がって、逃げ出したのは美奈子でしょう・・・」

「そうだけど・・・。遠くから信哉さんを見ていたら、手放してしまった人の大きさに気がついて、それからとても後悔したの。自分

が悪いのも分かってる。でも、あの時、七瀬と入れ替わらなかったら私の夫だった人なんだって思うと、この気持ちがどうにも抑えられなくなって、七瀬がどうしても許せなくなって・・・」

七瀬は、何も言えなかった・・・。

確かに、あの時入れ替わらなかったら、美奈子の夫だった人だ・・・。

でも、自ら手放してしまったのも美奈子だ・・・。

あの時、もし美奈子が手放さなかったら、私はどうなっていたのだろう・・・。

やっぱり嫉妬の炎に燃え狂って、美奈子の様な事をしていたのだろうか・・・。

入れ替わらなかったら、信哉さんは美奈子を愛したのだろうか？

複雑な重苦しい気持ちだった。

重い足取りで家に帰ったら、いつもの優しい笑顔の信哉さんが立ってた。

「僕にも責任があるような気がするよ。結婚のチャンスも少なくて、愛情よりも誰でも良いから家族になってくれる人を求めてたんだ・・・。でも、七瀬に出会って、気持ちはがらりと変わった・・・」

一緒に並んでソファーに座っていた七瀬を優しく抱き寄せて、七瀬の頭に優しく頬を寄せた。

「あの時入れ替わらなかったとしても、美奈子ちゃんとの結婚生活は長く続かなかったと思う・・・。それに、盲目の僕を美奈子ちゃんも愛さなかったと思うよ。あの時逃げ出したのが真実なんだよ」

信哉は優しく七瀬の頬にキスをした。

「七瀬は、盲目の時も、目の見える様になった時も、ずっと変わらずまっすぐな心の目で僕を見続けてきてくれたんだ。僕自身を．．．。そんな七瀬が愛おしくてたまらないんだ」

「信哉さん．．．」

「美奈子ちゃんとの結婚はイミテーションで、これから先、七瀬と一緒に歩んで行く未来が本物だと思ってる」

あの日、あの時、身代わり花嫁だった私は、信哉さんと出会った瞬間、本物の愛を手に入れたのかもしれない．．．。

（第１３話に続く）

第１３話　私は本物の花嫁

ーーーーあれから七瀬は、卒業作品で念願の大賞をとった。
モデルは信哉・・・。
この絵を一目見たら、誰もが心温まり癒されるような淡い優しい色彩の心温まる優しい絵だった・・・。

その絵はもちろん信哉に、プレゼントした。
大変喜んだ事は言うまでもない。

ーーーーー大学院を卒業して、七瀬は結婚し、北川七瀬から鳳七瀬に変わり、油絵画家として大成功とまではまだいってないが、少しは名前も知れ渡るようになってきた。
時々剛志先輩と画廊で２人展を行ったり、剛志先輩とはアーティスト仲間としていい友達関係を築いている。

信哉と一緒に夢の美術館作りの方も頑張っている。
作品に触れて、感触を楽しめたり、音や光とアートを組み合わせたり・・・。
香りや・・・人の持っている五感で感じたり楽しんだりできる美術館・・・。
障害をもっている人も、健常者も、共に一緒に楽しめる美術館だ。
そして、今は時々、視覚障害の子供達の為にボランティアで、美術教室の講師も勤めてる。

信哉も仕事の傍ら、夢の美術館作りや、盲学校の資金援助・・・ボランテイア協力など頑張っている。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

それから１０年後・・・。
七瀬は３５歳、信哉は４２歳になっていた。

今は、緑も多い、田園調布の広い一戸建てに住んでいる。
そして年に数回、岩国にも遊びにやって来る。

岩国のおばあちゃんは数年前に亡くなったけれど、今でも岩国は七瀬の故郷・・・。
あのわらぶき屋根の農家の家と、小さな畑は七瀬が受け継ぎ、それ以外の田畑は、伯父伯母達が受け継いだ。
祖母が一度手放した思い出の山は、あれから信哉が買い戻してくれて、家族でタケノコや山菜、キノコ採りを楽しんだり、七瀬と信哉の３人のかわいい子供達の秘密基地（ツリーハウス）もある。
ツリーハウスは、家族皆で少しづつ作ったものだ。

普段わらぶきの家のメンテと、山と小さな畑の管理は、信哉がやとった作業員と時々伯父伯母夫婦が面倒を見ている。

昔ながらの骨董品のような古いわらぶきの家は、七瀬と信哉の子供達にとって、凄く新鮮な面白い空間らしく、毎年岩国に遊びに行くのをとても楽しみにしている。
子供達にとって、田舎があると言う事はとてもいい事だと2人は思っている。
出来るならば子供達の誰かが受け継いでくれて、ずっと代々大切に残して行ってくれたらいいなと漠然と思っている。

「信哉さん、熱すぎない？」
お風呂場の外で薪をくべる七瀬・・・。

「大丈夫！　良い湯加減だよ」
信哉さんと一緒にお風呂に入って、はしゃいでいるのは、３人の子供達・・・。
長男　信仁（しんじ）１０歳、次男　信吾（しんご）８歳、七海（ななみ）５歳。

パパの笑い声と、子供達の明るい笑い声が聞こえて来る・・・。

農家の庭先で薪を割る、信哉の姿も板についていて、すっかり逞しいかっこいいパパになった。
畑で子供達と一緒に農作業する姿も様になっている。

今日は伯父伯母が子供達３人を、連れ出して、夫婦水入らず・・・。
あの河原に腰かけて、お喋りする二人・・・。

「目の見えない時は、この河原にあんな立派な橋がかかってるなんて知らなかったよ」

「あれから何年経ったのかしらね？　私達大分、おじさん　おばさんに　なったわね　」

「でも、今でも君への気持ちは色褪せないな・・・。君と出会ってからの僕は、あったかな温泉に浸かってる様な感じって言うか・・・。毎日が楽しくて、幸せなんだ」

「私も、心の中のグラスがいつも幸せで一杯なの」

二人は微笑んで見つめ合って、優しくキスをした・・・。

「沢山の幸せを、ありがとう七瀬」

「沢山の幸せを、ありがとう信哉さん」

あの時と同じように、緩やかな優しい風が、草をそっと揺らし、川のせせらぎが心地よく聞こえてくる。

もう間もなく、日が沈み、辺り一面燃えるような赤に染まるだろう・・・。

夕方になったら、子供達も家に戻って来て、明るい笑い声に包まれるだろう・・・。

ーーーーー　ＥＮＤ　ーーーーー

第１３話　私は本物の花嫁（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございました。（＾＾）
岩国弁について、色々教えて下さったりょく様・・・ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6706t/

イミテーション・ブライド

2011年7月3日01時41分発行